岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第462集

中佐井Ⅷ遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業浅沢地区関連遺跡発掘調査

岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

中佐井Ⅷ遺跡発掘調査報告書

（なかさいはち）

中山間地域総合整備事業浅沢地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の事前の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手郡安代町浅沢地区の中山開地域総合整備事業に関連して、中佐井Ⅷ遺跡内にある工事予定区域を発掘調査した結果のまとめであります。調査で検出された遺構数は少ないものの、縄文時代中期の土器を中心とした遺物が出土しており該期の貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時にその保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室、安代町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成16年10月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県岩手郡安代町字中佐井42ほかに所在する中佐井Ⅷ遺跡に含まれる工事予定区域を発掘調査した結果の収録である。
2．本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。
　遺跡番号：JE55-1224　遺跡略号：NSⅣ－03
3．本遺跡の調査は中山間地域総合整備事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
4．野外調査期間、調査面積及び調査担当者は以下の通りである。
　調査期間：平成15年４月８日～６月３日
　調査面積：1,550㎡
　調査担当者：亀 大二郎・小林 弘卓
5．室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。
　整理期間：平成15年11月１日～平成16年３月31日
　整理担当者：亀 大二郎・小林 弘卓
6．本報告書の執筆は亀大二郎と小林弘卓が分担し、編集は亀大二郎が行った。
7．各種の鑑定・分析は次の機関にお願いした。
　石材鑑定：花崗岩研究会
　火山灰分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
8．基準点の測量及び空中写真撮影は次の機関に委託した。
　基準点測量：(株)土木技術コンサルタント
　空中写真撮影：東邦航空株式会社
9．野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。(五十音順、敬称略)
　鎌田 勉(岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課)、東本 茂樹(安代町教育委員会)
10．野外調査では安代町の地元の方々から多大なるご協力を頂いた。
11．本遺跡から出土した遺物及び調査に係わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

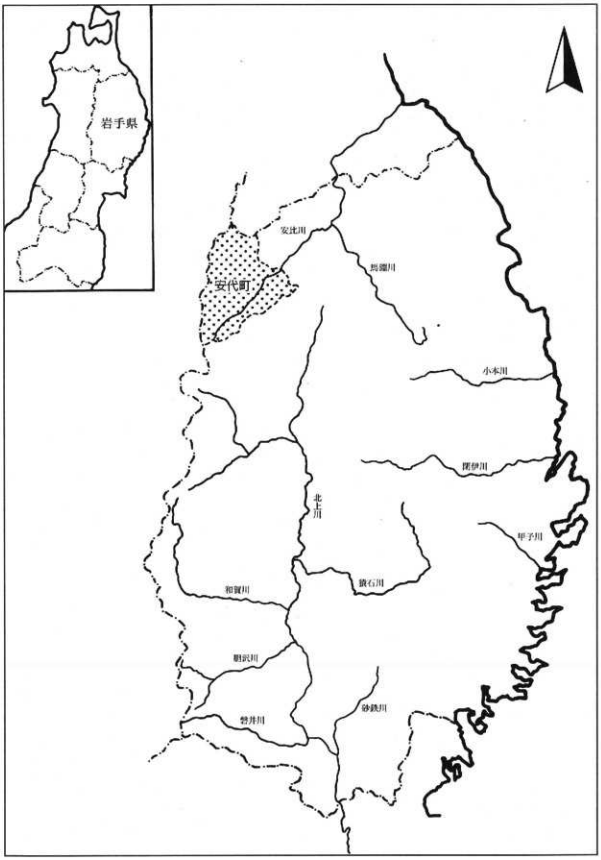
目　次

【本　文】

【表】

【図　版】

【写真図版】



第1図　岩手県全図

第2図　遺跡の位置図

Ⅰ　調査に至る経過

中山間地域総合整備事業浅沢地区は岩手郡安代町の旧浅沢村を事業区域とし、地域の農業農村の活性化を図るため、ほ場整備、農道整備などの農業基盤整備のほか、集落道、農村公園などの農村生活環境整備を総合的に実施する計画で平成12年度に事業採択され、平成15年度から着工する予定である。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、当該事業の施行主体である岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室の依頼を受け、調査計画段階の平成11年度から平成13年度にかけて岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議の結果、発掘調査が必要となり、平成15年度、財団法人岩手県文化振興事業団に調査を委託することになったものである。

（岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．遺跡の立地と地形（第1～5図）

中佐井Ⅶ遺跡が所在する安代町は、岩手県の北西端に位置し、北は青森県田子町、西は秋田県鹿角市、東は浄法寺町、南は西根町と松尾村に隣接している。人口約6,400人、面積460.24km²の町で、奥羽山脈の山間にある。標高は200mより低位なところはなく、周囲を八幡平など1,000mを超える山々に囲まれている。40度以北に位置し、年平均気温は9度、年間降水量は1,330mmで、冬季は積雪の多い厳寒な地域である。町内には国道282号とＪＲ花輪線が南から西へ弧状に延び、これとほぼ並行して東北自動車道が通っている。また、国道282号は五日市地区で県道6号（主要地方道二戸－安代線）へ、東北自動車道は安代ＪＣで八戸自動車道へと分岐しており、岩手・青森・秋田県を結ぶ交通の要衝となっている。

安代町のほぼ中央に位置する貝梨峠付近には、太平洋に東流する安比川（馬淵川の支流）と日本海に西流する米代川の分水嶺がある。昭和31年に荒沢村と田山村が合併する際「安代」と命名したのは、この分水嶺に由来している。

安比川河川の左岸部は時沢、曲田川、日名市沢の合流点と曲田川の両岸に段丘が発達していて、他は小・中起伏山地が広がっている。一方、右岸部は中佐井地区及び柿ノ木平の一部が段丘になっているだけで、ほとんどが標高300～400m程度の丘陵地である。左岸部の奥は場山、花小袖峰、太平山等の標高500～600m級の山地が続いており、右岸部には七時雨山、田代山、毛無森など標高900～1000m級の山地が連なっている。

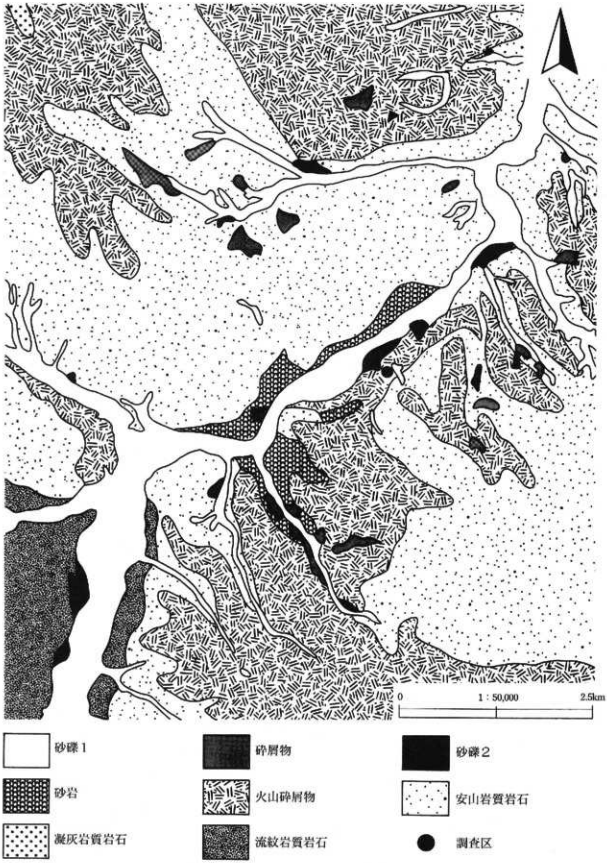
安代町周辺の山地は主に第三紀以降の火山性岩盤を基盤とし、特に第四紀以降の安山岩質の岩石や火山砕屑物が広く分布している。また、安比川や沢沿いの谷底平野には細長く沖積層が堆積し、河川沿いに形成された段丘面には浮石流凝灰岩やその上位の八戸火山灰といった火山灰堆積物が覆っている。

中佐井Ⅶ遺跡はＪＲ花輪線の荒屋新町駅より北東約4kmの地点にあり、安比川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。遺跡周辺の地表は、ほとんどが段丘に載る八戸火山灰を母材とする黒ボク土系の土壌と思われる。

第３図　周辺の地形と調査区


Fr
Fr
0
1：50,000
2.5km
中起伏山地
小起伏山地
山麓地及び他の緩斜面
中起伏火山地
丘陵地Ⅰ
火山灰砂段丘Ⅰ
火山灰砂段丘Ⅱ
扇状地
崖錐性扇状地
谷底平野及び氾濫平野
Fr 旧河道
人工改変地
崖
壁岩
一級河川
調査区

第4図　地形図



第5図　地質図

2．遺跡の基本層序

調査区の現地形は北東側（C区）が段状の斜面になっている以外ほとんど平坦であるが、十和田ａ降下火山灰層まで下げた旧地形は中央付近から南西端に向かって勾配がきつくなっている。現況は畑地で長芋耕作等の人為的攪乱部分が多く、古代以前の地形に起伏があるため、表土下の層位は地点によって異なる。Ｔ１～Ｔ２トレンチ間（Ａ３）は、表土下が八戸火山灰層（Ⅵ層）になり、Ｔ２～Ｔ３トレンチ間（Ａ２）は、表土下に黒色土層（Ⅱ層）がつづいてその下が八戸火山灰層になる。Ｔ３トレンチより南西側（Ａ１、Ｂ１～Ｂ４）は、概ね基本層序どおりである。（北東側斜面については下図を参照）

（基本層序）

Ⅰ層　10ＹＲ3/4(暗褐) しまりやや有、粘性有（表土及び耕作土）

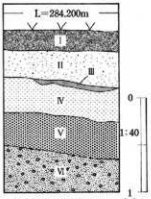
Ⅱ層　10ＹＲ2/1(黒) しまりやや有、粘性有

Ⅲ層　10ＹＲ7/4(にぶい黄橙) しまり・粘性欠（十和田ａ降下火山灰層）

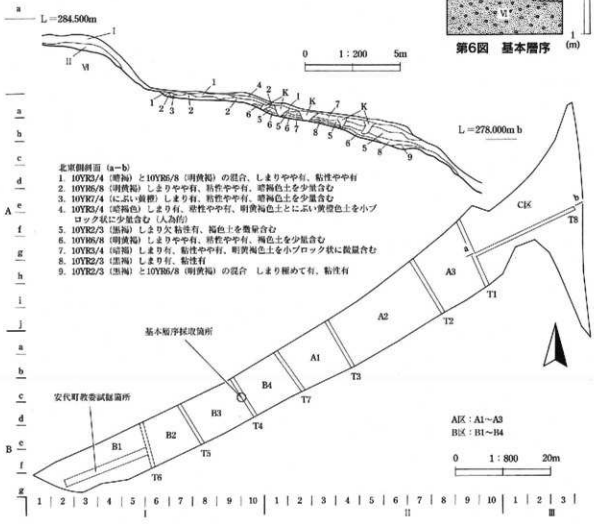
Ⅳ層　10ＹＲ3/2(黒褐) しまりやや有、粘性有

Ⅴ層　10ＹＲ2/2(黒褐) しまりやや有、粘性有

Ⅵ層　10ＹＲ5/8(黄褐) しまり有、粘性やや有（地山：八戸火山灰層）



第6図　基本層序



第7図　地区名・トレンチ設置箇所

3．周辺の遺跡（第8図、第1表）

岩手県教育委員会の平成14年度の報告によると安代町内では225遺跡が確認されており、その内第8図中に掲載している遺跡は128箇所ある。複数期に跨るものを含めた時期ごとの遺跡数は、縄文時代が112箇所、弥生時代が8箇所、古代が15箇所、中世が10箇所、近世が10箇所である。

〈縄文時代の遺跡〉

縄文時代の遺跡は数多くあり、第8図中でも約9割を占めているが、草創期の遺跡は現在までのところ確認されていない。また、早期の遺跡も有矢野遺跡（115）以外は見つかっていない。

前期の遺跡には、古屋敷Ⅰ遺跡（13）、中佐井Ⅱ遺跡（17）、繁沢Ⅱ遺跡（41）、湯ノ沢Ⅲ遺跡（46）、谷地田Ⅰ遺跡（72）、横岡Ⅱ遺跡（89）、横岡台遺跡（90）などがある。このうち横岡Ⅱ遺跡からは、捨て場に伴う多量の遺物が出土している。中期の遺跡には、晴山Ⅰ遺跡（1）、古屋敷Ⅱ遺跡（14）、中佐井Ⅳ遺跡（19）・Ⅵ遺跡（21）・Ⅶ遺跡（22）・Ⅹ遺跡（25）、岩本向Ⅰ遺跡（26）、下の田Ⅱ遺跡（30）、湯ノ沢Ⅰ遺跡（44）・Ⅱ遺跡（45）、月名市Ⅱ遺跡（68）などがある。図の範囲からは南に外れるが昭和54～55年に調査が行われた赤坂田Ⅱ遺跡では、中期末葉の住居跡から大然アスファルト塊が検出されている。後期の遺跡には、石神Ⅵ遺跡（9）、岩屋Ⅰ遺跡（38）・Ⅱ遺跡（39）、水神遺跡（37）、上の山Ⅲ遺跡（105）・Ⅶ遺跡（109）などがある。昭和59年に調査が行われた水神遺跡では、16棟の住居跡が確認されている。晩期の遺跡としては、山口遺跡（3）、山の神遺跡（15）、山岸Ⅰ遺跡（27）・Ⅱ遺跡（28）、曲田Ⅰ遺跡（91）、上の山Ⅲ遺跡（105）・Ⅹ遺跡（112）、有矢野遺跡（114）などが挙げられる。中でも曲田Ⅰ遺跡からは58棟もの住居跡が検出され、晩期の大集落跡が確認されている。

〈弥生時代の遺跡〉

弥生時代の遺跡には、蛇の沢Ⅰ遺跡（2）、水神遺跡（37）、上の山Ⅱ遺跡（104）・Ⅸ遺跡（111）、曲田Ⅰ遺跡（91）などがある。上の山Ⅱ遺跡では天王山くずれの土器片が採集されており、曲田Ⅰ遺跡では弥生時代の墓壙が検出されている。

〈古代の遺跡〉

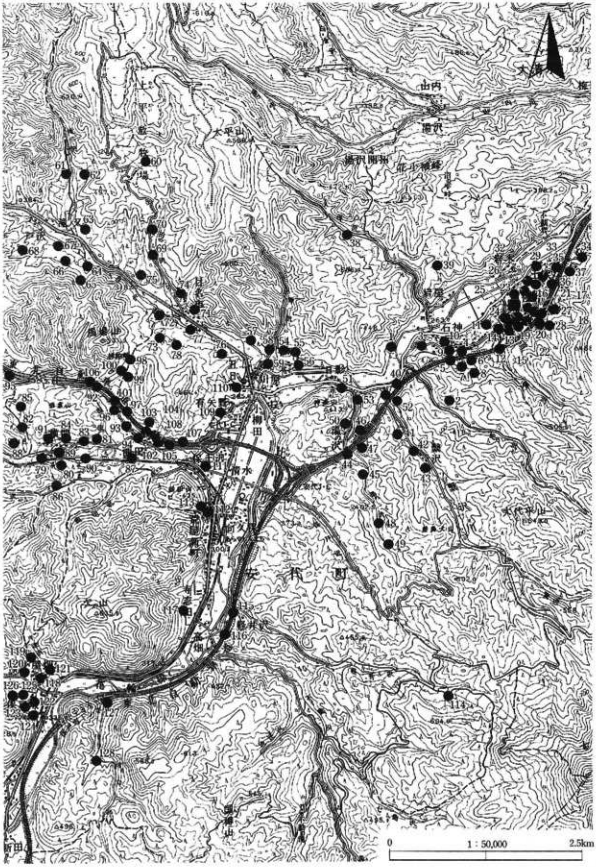
調査が行われた古代の遺跡は少なく、また北ノ城館（11）、有矢野館（115）、上の山Ⅶ遺跡（109）・Ⅹ遺跡（112）などほとんどが平安時代のものである。このうち上の山Ⅶ遺跡では約40棟の住居跡と倉庫と推定される竪穴状遺構約10棟が検出されており、関沢Ⅱ遺跡（12）では鍛冶遺構などが確認されている。

〈中世の遺跡〉

中世の遺跡としては館跡があり、現在20箇所確認されている。そのうち調査が行われたものは上の山館（113）、有矢野館（115）、北ノ城館（11）で、平成9年より部分的に調査が行われた北ノ城館からは、二重に巡る空堀が確認されている。

〈近世の遺跡〉

安代町には盛岡市と秋田県鹿角市を結ぶ道路として「鹿角街道」があり、その街道沿いに一里塚が設けられている。町内には七時雨一里塚、荒屋一里塚（118）、曲田一里塚（100）、苗代一里塚の4基が現存しており、町の指定文化財になっている。この他、近世の遺跡として、山山番所跡、苗代沢窯跡、瀬戸谷地窯跡などが挙げられる。



第8図　周辺の遺跡図

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代・時期	遺跡の性格・遺構・遺物	所在地	備考
1	殿山Ⅰ	縄文中～晩期	散布地	安代町字殿山	旧名 岩屋遺跡
2	蛇の沢Ⅰ	弥生	包蔵地 ・住口土器、査	安代町字石神	
3	山口	縄文後～晩期	散布地	安代町字山口	
4	石神Ⅰ	縄文	散布地	安代町字石神	
5	石神Ⅱ	縄文～近世	散布地	安代町字石神	八戸道により消滅
6	石神Ⅲ	縄文	散布地	安代町字石神	
7	石神Ⅳ	縄文	散布地	安代町字石神	
8	石神Ⅴ	縄文	散布地	安代町字石神	
9	石神Ⅵ	縄文後期	散布地	安代町字石神	
10	石神城	縄文～中世	城館跡、散布地	安代町字石神	HG安代町教委調査、別称 八幡館
11	北の城館	縄文前～後期、平安～中 ·近世	城館跡、集落跡	安代町字中佐井	H9·11·12-14 安代町教委調査、岩埋文第438集
12	鍛沢口	縄文中～後期	集落跡	安代町字鍛口沢	岩埋文第95集
13	古屋敷Ⅰ	縄文前～後期、平安	散布地	安代町字古屋敷	旧名 古屋敷遺跡
14	古屋敷Ⅱ	縄文中～後期	散布地	安代町字古屋敷	
15	山の神	縄文後～晩期、平安	集落跡	安代町字中佐井	
16	中佐井Ⅰ	縄文後～晩期	集落跡	安代町字中佐井	
17	中佐井Ⅱ	縄文前～後期	集落跡	安代町字中佐井	
18	中佐井Ⅲ	縄文	集落跡	安代町字中佐井	
19	中佐井Ⅳ	縄文中～後期	集落跡	安代町字中佐井	
20	中佐井Ⅴ	縄文	集落跡	安代町字中佐井	八戸道により消滅
21	中佐井Ⅵ	縄文前～中期、平安	集落跡	安代町字中佐井	
22	中佐井Ⅶ	縄文前～晩期、平安	散布地	安代町字中佐井	
23	中佐井Ⅷ	縄文中～晩期	集落跡・竪穴住居跡、陥し穴等	安代町字中佐井	米調査遺跡
24	中佐井Ⅸ	縄文	集落跡	安代町字中佐井	
25	中佐井Ⅹ	縄文中期	集落跡	安代町字中佐井	
26	岩本向Ⅰ	縄文中～晩期	集落跡	安代町字岩本向	
27	山岸Ⅰ	縄文後～晩期	散布地	安代町字山岸	
28	山岸Ⅱ	縄文後～晩期	集落跡	安代町字山岸	
29	下の田Ⅰ	縄文後～晩期	散布地	安代町字下の田	旧名 下の田遺跡
30	下の田Ⅱ	縄文中～後期	散布地	安代町字下の田	
31	下の田Ⅲ	縄文後～晩期	散布地	安代町字下の田	
32	下の田Ⅳ	縄文	散布地	安代町字下の田	
33	下の田館	縄文晩期	集落跡、城館跡	安代町字下の田	城館遺構不明
34	土沢Ⅰ	縄文	散布地	安代町字土沢	
35	土沢Ⅱ	縄文後～晩期、近世	散布地	安代町字土沢	
36	土沢Ⅲ	縄文	散布地	安代町字土沢	
37	水神	縄文中～後期、弥生	集落跡 ·竪穴住居跡、陥し穴等	安代町字土沢 ·水神	岩埋文第96集、八戸道により消滅
38	岩屋Ⅰ	縄文後期	散布地	安代町字岩屋	
39	岩屋Ⅱ	縄文後期	散布地	安代町字岩屋	
40	繁沢Ⅰ	縄文	散布地	安代町字繁沢	旧名 繁沢遺跡
41	繁沢Ⅱ	縄文前～中期	散布地	安代町字繁沢	岩埋文第79集
42	繁沢Ⅲ	縄文	散布地	安代町字繁沢	
43	繁沢Ⅳ	縄文	散布地	安代町字繁沢	
44	湯ノ沢Ⅰ	縄文中～後期	集落跡	安代町字湯ノ沢	
45	湯ノ沢Ⅱ	縄文中～晩期	散布地	安代町字湯ノ沢	
46	湯ノ沢Ⅲ	縄文前～後期	集落跡・竪穴住居跡等	安代町字湯ノ沢	岩埋文第79集、東北道により消滅
47	湯ノ沢Ⅳ	縄文	散布地	安代町字湯ノ沢	
48	湯ノ沢Ⅴ	縄文	集落跡	安代町字湯ノ沢	
49	湯ノ沢Ⅵ	縄文	集落跡	安代町字湯ノ沢	
50	湯ノ沢Ⅶ	縄文	集落跡	安代町字湯ノ沢	
51	日影Ⅰ	縄文	散布地	安代町字日影	旧名 日影遺跡
52	日影Ⅱ	縄文	散布地	安代町字日影	旧名 日影Ⅰ遺跡
53	日影Ⅲ	縄文	散布地	安代町字日影	旧名 日影Ⅱ遺跡
54	下町Ⅰ	縄文	散布地	安代町字下町	
55	下町Ⅱ	縄文	散布地	安代町字下町	
56	下町Ⅲ	縄文	散布地	安代町字下町	
57	五日市Ⅰ	縄文	散布地	安代町字五日市	
58	五日市Ⅱ	縄文	散布地	安代町字五日市	

地	遺跡名	時代・時期	遺跡の性格・遺構・遺物	所在地	備考
59	五日市館	中世	城館跡	安代町字五日市	別称 星城
60	戸沢Ⅰ	縄文	散布地	安代町字戸沢	
61	戸沢Ⅱ	縄文	散布地	安代町字戸沢	
62	戸沢Ⅲ	縄文	散布地	安代町字戸沢	
63	戸沢Ⅳ	縄文	散布地	安代町字戸沢	
64	戸沢Ⅴ	縄文	散布地	安代町字戸沢	
65	田の沢Ⅰ	縄文	散布地	安代町字田の沢	
66	田の沢Ⅱ	縄文	散布地	安代町字田の沢	
67	目名市Ⅰ	縄文	散布地	安代町字目名市	
68	目名市Ⅱ	縄文前～晩期、弥生	散布地・竪穴状遺構等	安代町字目名市	岩埋文第261集、奥通新設により消滅
69	目名市Ⅲ	縄文	散布地	安代町字目名市	
70	目名市館	縄文、中世	城館跡	安代町字目名市	
71	目名市古館	縄文、中世	城館跡	安代町字目名市	
72	谷地田Ⅰ	縄文前～晩期、平安、中世	集落跡・竪穴住居跡、竪穴建物跡等	安代町字谷地田	岩埋文第303集
73	谷地田Ⅱ	縄文	散布地	安代町字谷地田	
74	谷地田Ⅲ	縄文	散布地	安代町字谷地田	
75	打田内Ⅰ	縄文	散布地	安代町字打田内	採場整備により消滅
76	打田内Ⅱ	縄文	散布地	安代町字打田内	採場整備により消滅
77	打田内Ⅲ	縄文	散布地	安代町字打田内	採場整備により消滅
78	打田内Ⅳ	縄文	散布地	安代町字打田内	
79	打田内Ⅴ	縄文	散布地	安代町字打田内	採場整備により消滅
80	打田内Ⅵ	縄文	散布地	安代町字打田内	
81	打田内Ⅶ	縄文	散布地	安代町字打田内	旧名曲田Ⅳ遺跡
82	打田内Ⅷ	縄文	集落跡	安代町字打田内	旧名曲田Ⅴ遺跡
83	打田内Ⅸ	縄文	散布地	安代町字打田内	旧名曲田Ⅵ遺跡
84	打田内Ⅹ	縄文	集落跡	安代町字打田内	旧名曲田Ⅶ遺跡
85	打田内?	縄文	散布地	安代町字打田内	採場整備により消滅
86	打田内?	縄文	散布地	安代町字打田内	
87	八幡白山	縄文	散布地・風穴群	安代町字打田内	
88	横間Ⅰ	縄文	集落跡	安代町字打田内	
89	横間Ⅱ	縄文前～中期、近世	集落跡・竪穴住居跡、捨て場等	安代町字打田内	岩埋文第303集
90	横間台	縄文前～中期、古代	散布地	安代町字打田内	
91	曲田Ⅰ	縄文、弥生、中・近世	集落跡・竪穴住居跡等	安代町字曲田	岩埋文第87集、東北道により消滅
92	曲田Ⅱ	縄文	散布地	安代町字曲田	
93	曲田Ⅲ	縄文	散布地	安代町字曲田	
94	曲田Ⅳ	縄文	散布地	安代町字曲田	曲田一里塚東側に隣接
95	曲田Ⅴ	縄文	集落跡	安代町字曲田	曲田一里塚西側に隣接
96	曲田Ⅵ	縄文	散布地	安代町字曲田	田中田区遺跡、東北道により消滅
97	曲田Ⅶ	縄文	散布地	安代町字曲田	
98	曲田Ⅷ	縄文	散布地	安代町字曲田	
99	曲田Ⅸ	縄文	散布地	安代町字曲田	
100	曲田一里塚	近世	一里塚	安代町字曲田	安代町指定文化財
101	曲田経塚Ⅰ	近世	経塚	安代町字上の山	
102	曲田経塚Ⅱ	近世	経塚	安代町字上の山	
103	上の山Ⅰ	縄文	散布地	安代町字上の山	奥道の新設により消滅
104	上の山Ⅱ	縄文、弥生	散布地	安代町字上の山	
105	上の山Ⅲ	縄文後～晩期	集落跡・磨玉製製管玉	安代町字上の山	
106	上の山Ⅳ	縄文、平安	散布地	安代町字上の山	
107	上の山Ⅴ	縄文、平安	集落跡	安代町字上の山	東北道により消滅
108	上の山Ⅵ	縄文	散布地	安代町字上の山	
109	上の山Ⅶ	縄文、弥生、平安	竪穴住居跡等	安代町字上の山	岩埋文第60集
110	上の山Ⅷ	縄文中～後期、古代	散布地	安代町字上の山	
111	上の山Ⅸ	縄文中～後期、近世	散布地	安代町字上の山	55年～56年度調査報告書、東北道により消滅
112	上の山Ⅹ	縄文中～晩期、平安	散布地・竪穴住居跡等	安代町字上の山	岩埋文第38集、東北道により消滅
113	上の山第	縄文、弥生、平安、中世	城館跡、集落跡・曲輪、柵、犬走り等	安代町字上の山	岩埋文第40集、東北道により消滅
114	有矢野	縄文早～後期、弥生、古代	集落跡・竪穴住居跡等	安代町字五日市	岩埋文第38・303集
115	有矢野館	縄文、平安、中世	散布地、城館跡・竪穴住居跡、竪穴建物跡等	安代町字五日市	岩埋文第303集、旧名上の山館
116	畑土沢	縄文	散布地	安代町字清水	昭50安代町総合調査
117	荒屋館	縄文、中世	散布地、城館跡	安代町字荒屋新町	別称 新町館
118	荒屋一里塚	近世	一里塚	安代町字荒屋新町	安代町指定文化財

Ⅲ　調査の概要と整理方法

1．調査経過

発掘調査は平成15年4月8日から同年6月3日まで行った。3月下旬に実施した調査前の現地確認では調査区全体にまだ数十cmの積雪があったので除雪剤を撒いて融雪を早め、予定通りに開始することが出来た。4月8日午後機材を搬入し、プレハブ事務所・休憩室・遺具置き場の設営を行った。翌日は雨天のため作業は中止し安代町教育委員会にて資料収集を行い、翌10日からトレンチ入れを開始した。

トレンチは調査区が北東－南西方向に細長いため、調査区の長軸に対して直角に7箇所、ほぼ等間隔に設定した。また、北東端の斜面部分には長軸と平行に設定した（第7図）。トレンチ入れの結果、北東側は深さ30cm前後のところで地山（八戸火山灰層）に達するが、南西に向かうに従って地山までの土層が厚くなっていき、南西端では1.5m程度に達した。現況では調査区はほぼ平坦であるが、地山にあたる八戸火山灰層の上面では調査区のほぼ中央から調査区の南西端に向かって窪んでいく谷地形をしていることが判った。

北東側は地山までの層が薄いため重機による粗掘りでは遺構を傷つける可能性があるので人力にて表土剥ぎを行うこととし、南西側の層が厚い部分は重機で行うことにした。人力による表土剥ぎは4月14日から、重機による表土剥ぎは4月17日から開始した。基準杭の設置は、設置予定箇所の粗掘りが終了した4月22日に行った。

遺構検出は4月24日から開始し、北東側から南西側に向かって鋤簾掛けを行いながら進めていった。北東側の検出は表土下及び地山に当たる八戸火山灰層の上面で行い、南西側は表土下（Ⅱ層上面）、十和田ａ降下火山灰層下（Ⅳ層上面）、及びⅥ層（八戸火山灰層）の上面で行っている。遺構は北東側での2度目の検出（八戸火山灰層上面）の際、竪穴住居を1棟、竪穴状遺構を1棟確認している。南西側では十和田ａ降下火山灰層下（Ⅳ層上面）での検出の際に、溝状陥し穴を1基検出している。そのほか各検出面で土坑を二十数基確認したが、壁の立ち上がり状態や埋土から遺構と判断できるものは十数基に絞られた。

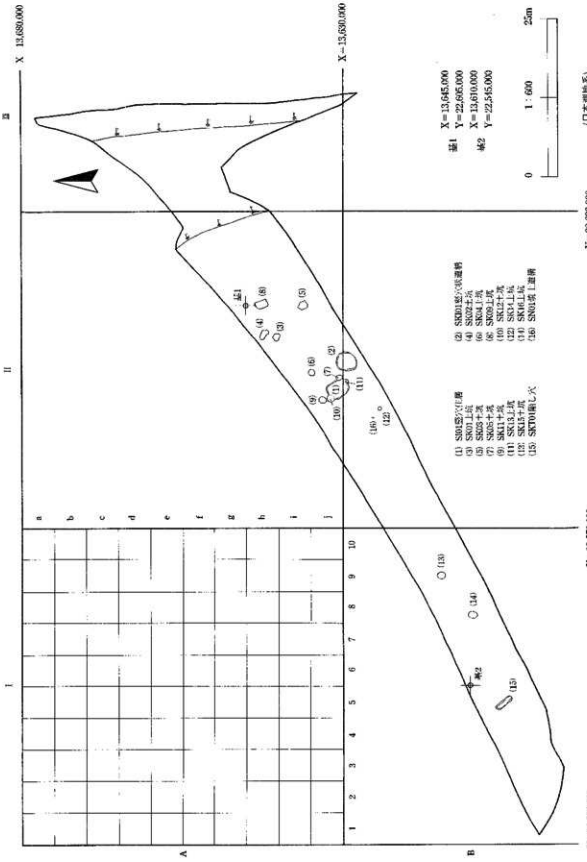
全調査日数35日のうち雨天によって作業が中止になったのは4日間だけと天候にも恵まれ、遺構の掘削と精査はほぼ予定通りに進み、5月27日に委託者（岩手県盛岡地方振興局農政部農村整備室）及び岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の立ち会いのもとに終了確認を行った。翌28日にセスナ機による空撮を実施し、6月3日に撤収した。

2．調査方法

（1）グリッドの設定と遺構名

調査区全体をカバーできるよう国家座標第Ⅹ系（日本測地系）に合わせて座標設定及びグリッドの設定を行うこととした。調査区外の北西隅を始点とし、50m間隔で西から東に向かいⅠ～Ⅲとローマ数字を、北から南に向かいＡ・Ｂとアルファベット大文字をあてて大グリッドを設定し、さらに各グリッドを5ｍ間隔で10等分して、同様に西から東へ1～10とアラビア数字を、北から南へａ～ｊとアルファベット小文字をあてて、それらの組み合わせで小グリッドを表すこととした。実際に調査を行う上では、便宜上北西隅の杭にグリッド名を記載し、ⅠＡ－2ｂというように呼称した。なお、始点となった原点（ⅠＡ－1ａ）の国家座標Ⅹ系（日本測地系）における座標値は　Ⅹ＝13,680.0000、Ｙ＝22,520.0000　である。

実際のグリッド設定を行う上で、基準杭設置は(株)土木技術コンサルタントに委託することとした。今回設置したのは基準杭2点と補助杭6点で、各杭における座標値（日本測地系及び世界測地系）は第2表の通



第9図　グリッド設置・遺構配置図

りである。調査の進行に伴いこれらの杭を使用し、グリッドの設定を行った。

第２表　各基準杭・補助杭における日本測地系値及び世界測地系値

測地系	日本測地系		世界測地系	
杭　名	X座標(m)	Y座標(m)	X座標(m)	Y座標(m)
基準杭１	13,645.0000	22,605.0000	13,952.3227	22,306.3437
基準杭２	13,610.0000	22,545.0000	13,917.3230	22,246.3429
補助杭１	13,650.0000	22,620.0000	13,957.3227	22,321.3439
補助杭２	13,635.0000	22,605.0000	13,942.3228	22,306.3436
補助杭３	13,600.0000	22,545.0000	13,907.3231	22,246.3427
補助杭４	13,610.0000	22,560.0000	13,917.3230	22,261.3430
補助杭５	13,645.0000	22,615.0000	13,952.3227	22,316.3438
補助杭６	13,650.0000	22,625.0000	13,957.3227	22,326.3439

遺構名は、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化し、これに検出順に番号を付けて、ＳＩ01、ＳＫ02というように命名した。なお、精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断した番号については、混乱を防止するため欠番とした。

本調査で使用した遺構略号は、第３表のとおりである。

第３表　遺構略号

略　号	遺構の種類	略　号	遺構の種類	略　号	遺構の種類
ＳＩ	竪穴住居跡	ＳＫ	土　　坑	ＳＮ	焼土遺構
ＳＫＩ	竪穴状遺構	ＳＫＴ	陥し穴		

（2）粗掘りと遺構検出

雑物撤去後に遺構の確認面までの深さ、層序及び遺物の包含状況を把握するため、調査区内に地形に沿うようトレンチを設定した。その結果、調査区中央から北東側の平坦部は、現況が畑地であるため削平を受けており、表土及び耕作土直下において既に第Ⅵ層（八戸火山灰層）となるが、南西側は急激に落ち込む谷地形となっているため、数度の検出を要することが判った。また、調査区北東側の段状部分においては人為的に斜面を削平している状況が確認できたため、現況の地形や周辺に北ノ城館跡が存在することから、本調査区まで中世城館跡の範囲が拡大している可能性が考えられた。以上の結果から、表土及び耕作土直下面を中世以降の検出面と考え、人力と一部重機を用いてこれらを除去し検出作業を行ったが、中世期に伴う遺構・遺物は確認されなかった。そのため、再度重機を使用して第Ⅱ層を除去し、検出作業を行った。この第Ⅱ層下面で遺構が確認された部分では随時精査を行い、遺構が確認されなかった谷部については重機を使用して第Ⅵ層面まで掘り下げて、遺構検出を行った。なお、調査区北東部の一段低位となる部分については、重機の搬入が困難であったため、すべて人力によって粗掘りを行った。

（3）遺構の精査と遺物の取り上げ

竪穴住居・竪穴状遺構は４分法、土坑・陥し穴・焼土遺構は２分法を原則として覆土の観察を行ったが、

必要に応じてその他の方法も併用した。記録として必要な図面及び写真の撮影は、精査の各段階において適宜行った。遺構の平面実測にあたっては、簡易遣り方測量で５ｍグリッドを１ｍに細分したメッシュを用いて行った。実測図の縮尺は原則として１/20とし、平面図と断面図を作成した。竪穴住居の炉と焼土遺構については縮尺を１/10とした。

出土遺物は、遺構内出土については遺構名・埋土位置を記入し、床面の遺物については写真撮影及び図面作成後に採り上げた。遺構外出土についてはグリッド単位または区域名と層位を記入して採り上げた。

（4）写真撮影

野外調査での写真撮影は、35mm判カメラ２台（モノクロ、カラーリバーサル）を使用し、対象によって６×７cm判カメラを併用した。撮影にあたっては、内容を記載した「撮影カード」を対象物を撮る前に撮影し、整理作業を行い易いようにした。また、調査終了時には遠景（北方）及び近景（東方、直上）からの航空写真撮影を行った。

３．整理方法

図面の点検、遺物の洗浄の一部は野外調査と並行して進めた。

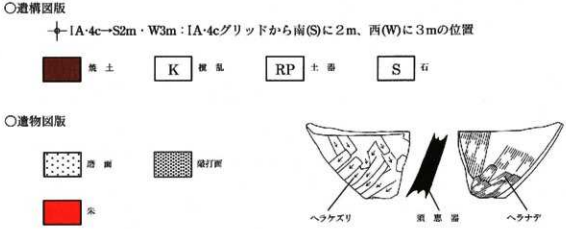
（1）遺構図面

遺構図面は点検後に第２原図を作成した。本図版中の各遺構の縮尺は、竪穴住居跡・竪穴状遺構・土坑及び陥し穴の平・断面図が１/40、焼土遺構の平・断面図及び竪穴住居内炉の断面図は１/20とした。

（2）遺物図面

遺物は水洗後、全出土遺物を点検して遺構内・外出土に分別し、注記・接合・復元・選別・登録・実測・トレース・写真撮影・図版作成といった手順で作業を行った。遺物図版及び遺物写真の縮尺は土器が１/３、剥片石器が１/２もしくは２/３、礫石器が１/４もしくは１/２、土製品・須恵器・磁器及び古銭は２/３としている。

遺構・遺物図版に使用した各記号、スクリーントーンについては下の凡例を参照いただきたい。



第10図　凡　例

Ⅳ　検出した遺構と出土遺物

1．検出した遺構

検出した遺構は竪穴住居が1棟、竪穴状遺構が1棟、土坑が12基、そのほか溝状陥し穴が1基、焼土遺構が1基である。

(1) 竪穴住居

ＳＩ01竪穴住居（第11図、写真図版3）

ⅡＡ・Ｂ－５ｊ・ａグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。ＳＫ05・ＳＫ12・ＳＫ13土坑と重複し、ＳＫ13土坑より新しくＳＫ05・ＳＫ12土坑より旧い。平面は長軸がＮ－35°－Ｗ方位を向くやや方形がかった楕円形を呈している。規模は長軸3.3m×短軸2.6mで、床面積が6.8㎡ある。壁高は東・西側が約30cm、北側が34cm、南側が17cmを測り、いずれの壁も床面から直角気味に立ち上がっている。埋土は上位が黒褐色土、下位が黄褐色土で11層に細分され、レンズ状に堆積している。また、中位には埋まる過程で棄てられたと思われる焼土塊があり、床面近くには炭化物が含まれている。床面は貼床をした痕跡はなく、平坦で堅く締まっている。柱穴や土坑などは確認されていない。

炉は床面のほぼ中央に設置してある。平面の形状は長軸50cm×短軸43cmの楕円形で、中央は５cmほど窪んでいる。周りに厚さ２cm程度の焼土がみられる。

遺物は埋土から縄文時代中期中葉の大木系土器片が数点と同時期と思われる円筒系の土器が４点（11、14、17、20）出土している。石器類は床面から石皿（205）、埋土の攪乱層から磨製石斧（206）が出土している。

(2) 竪穴状遺構

ＳＫＩ01竪穴状遺構（第12図、写真図版４）

ⅡＡ・Ｂ－６ｊ・ａグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は各辺がほぼ東西南北を向く隅丸方形を呈している。規模は長軸3.1m×短軸2.9mで、床面積が6.2㎡ある。壁高は東・南側が約40cm、西・北側が30～37cmを測る。また、いずれの壁も床面から直角気味に立ち上がり、南東隅は風倒木、北西側は長芋の耕作によって攪乱を受けている。埋土は３層に大別される。上位が黒褐色土、下位が暗褐色土で、壁際及び床面近くに粒状の黄褐色土を含んでいる。床面はほぼ平坦で堅く締まっており、柱穴や土坑などは確認されていない。

遺物は埋土上位から石槍（188）、中位から凹石（210）と石材の剥片が数点出土している。

(3) 土坑

ＳＫ01土坑（第12図、写真図版４）

ⅡＡ－６・７ｈグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は不整な楕円形で、長軸1.1m×短軸88cmを測り、長軸はＮ－40°－Ｗ方位を向いている。深さは約50cmで、壁は床面から外傾気味に立ち上がり、断面は鉢形を呈している。埋土は６層に細分され、上位が暗褐色土、下位が褐色土で底部に炭化物を多量に含んでいる。また、底面には薄く焼土の痕跡がみられる。炭窯跡の可能性も考えられるが、畑の耕作による影響で底・壁面が著しく歪んでおり、性格は不詳である。

遺物は埋土中位から石槍（189）が出土しているが、耕作の影響で他から紛れ込んだ可能性が高い。

ＳＫ02土坑（第12図、写真図版５）

ⅡＡ－７ｈグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は不整な長楕円形で、長軸1.6ｍ×短軸90cmを測り、長軸はＮ－52°－Ｗ方位を向いている。深さは約30cmで、壁は底面からややなだらかに立ち上がり、断面は浅い鍋状を呈している。埋土は７層に細分され、上位が暗褐色土、下位は黒褐色土と黄褐色土の混合土で構成され、底部に炭化物を含んでいる。炭窯跡だった可能性も考えられるが、ＳＫ01土坑と同様に壁面及び底面が歪んでいて性格は不詳である。

遺物は出土していない。

ＳＫ03土坑（第13図、写真図版３）

ⅡＡ－７・８ｉグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は楕円形で、長軸1.3ｍ×短軸1.1ｍを測り、長軸はＮ－18°－Ｗ方位を向いている。深さは13cm程度で、壁は底面からなだらかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈している。また、長芋の耕作による攪乱を受けている。埋土は黒褐色土と暗褐色土の２層に分かれる。

遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

ＳＫ04土坑（第13図、写真図版５）

ⅡＡ－５ｉ・ｊグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は楕円形で長軸96cm×短軸90cmを測り、長軸はＮ－77°－Ｗ方位を向いている。深さは約45cmで、壁は底面から緩やかに立ち上がり、断面形はＵ字状を呈している。埋土は上位が黄褐色土、下位が黒褐色土で、埋土全体に黄橙色土や黄褐色土をブロック状に含むことから、人為的な堆積と思われる。

遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

ＳＫ05土坑（第13図、写真図版５）

ⅡＡ－５ｊグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。ＳＩ01竪穴住居と重複し、ＳＩ01竪穴住居より新しい。平面は一辺が85cm程度の隅丸方形で、深さは30～40cmある。壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形は鍋状を呈している。また、長芋の耕作による攪乱を受けている。埋土は上位が黒褐色土、下位が暗褐色土の自然堆積である。

遺物は埋土の上位から縄文時代晩期の土器片が１点（22）出土している。

ＳＫ09土坑（第13図、写真図版４）

ⅡＡ－７・８ｈグリッドに位置し、Ａ１区のⅠ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は隅丸の長方形で、長軸2.0ｍ×短軸1.1ｍを測り、長軸はＮ－20°－Ｗ方位を向いている。深さは約40cmで、壁は底面から外傾気味に立ち上がり、断面形は浅い鍋状を呈している。埋土は上位が褐色土、下位が黄褐色土で、全体にブロック状の明黄褐色土を含むことから、人為的な堆積と思われる。

形状に特徴はあるが、遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

ＳＫ11土坑（第13図、写真図版４）

ⅡＡ－４・５ｊグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は楕円形で、長軸1.2ｍ×短軸1.0ｍを測り、長軸はＮ－13°－Ｗ方位を向いている。深さは約15cmで、壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈している。また、長芋の耕作による攪乱を受けている。埋土は暗褐色土の単層で、八戸火山灰層に類似するブロック状の黄褐色土を含んでいる。

遺物の出土がなく、時期・性格ともに不明である。

ＳＫ12土坑（第13図、写真図版６）

ⅡＡ－５ｊグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。ＳＩ01竪穴住居と重複しＳＩ01竪穴住居より新しいが、掘削は後から行っている。平面は直径1.1ｍの円形で、深さは約40cmある。壁は底面から直角気味に立ち上がり、断面形は鍋状を呈している。また、長芋の耕作による攪乱を受けている。埋土は４層に分かれ、上位は暗褐色土、下位は暗褐色土と明黄褐色土の混合土で構成されている。

遺物は埋土中位から壺の頸部と思われる土器片が１点（23）、石鏃が１点（190）、及び攪乱層から半円状の石器が１点（207）出土している。半円状の石器は、他から紛れ込んだ可能性が高い。

ＳＫ13土坑（第14図、写真図版６）

ⅡＢ－５ａグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。ＳＩ01竪穴住居と重複しＳＩ01竪穴住居より旧い。平面は楕円形で、長軸78cm×短軸67cmを測り、長軸はＮ－20°－Ｅ方位を向いている。深さは24cm程度で、壁は底面から直角気味に立ち上がり、断面形は鍋状を呈している。また、長芋の耕作による攪乱を受けている。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。

遺物は埋土中位から中期中葉の大木系の土器片が１点（24）、攪乱層から晩期の壺と思われる土器片が1点（25）、埋土中位から石材の剥片が２点出土している。

ＳＫ14土坑（第14図、写真図版７）

ⅡＢ－４ｂグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は楕円形で、長軸60cm×短軸47cmを測り、長軸はほぼ南北を向いている。深さは約25cmで、壁は底面から外傾気味に立ち上がり、断面形は鍋状を呈している。埋土は黒褐色土上体の３層に大別され、下位に粒状の黄褐色土が含まれている。また、底面には薄く焼土がみられる。

遺物は埋土下位から寛永通宝（218～221）がまとまって出土している。

ＳＫ15土坑（第14図、写真図版７）

ＩＢ－９ｃ・ｄグリッドに位置し、Ｂ３区のⅤ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は楕円形で、長軸1.2ｍ×短軸1.0ｍを測り、長軸はＮ－５°－Ｗ方位を向いている。深さは38cm程度で、壁は底面からやや緩やかに立ち上り、断面形は鍋状を呈している。埋土は２層に分かれ、上位が黒褐色土、下位がにぶい黄褐色土で、レンズ状に自然堆積している。

遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

ＳＫ16土坑（第14図、写真図版７）

ＩＢ－８ｄ・ｅグリッドに位置し、Ｂ３区のⅤ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。平面は楕円形で、長軸1.4ｍ×短軸1.1ｍを測り、長軸はＮ－1°－Ｅ方位を向いている。深さは北側が約45cmあり、壁は底面からやや外傾して立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

遺物は埋土の上位から円筒系土器片が１点（26）、中位から大木系土器片が１点（27）が出土している。

（４）溝状陥し穴

ＳＫＴ01陥し穴（第14図、写真図版７）

ＩＢ－５ｅ・ｆグリッドに位置し、Ｂ１区のⅤ層上面で検出している。平面は長楕円形で、長軸3.0ｍ×短軸80cmを測り、長軸はＮ－40°－Ｗ方位を向いている。深さは45～85cmあり、断面の形状は深いＵ字状を呈している。埋土は上位が黒色土、中位及び下位が黒褐色土で占められ、中位にブロック状の十和田ａ降下火山灰が含まれている。中位の層は一時期に流れ込んだようであるが、概ねレンズ状の自然堆積である。また、

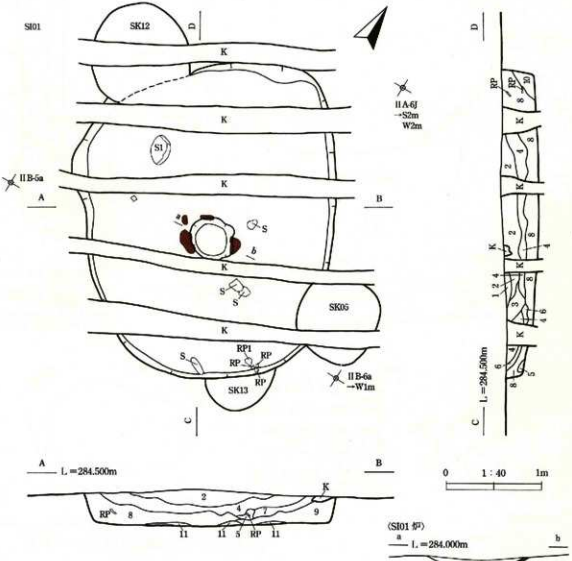
底部からは逆茂木痕と思われる小孔が2箇所確認されている。

遺物は出土していないが、類例から縄文時代の遺構と思われる。

(5) 焼土遺構

ＳＮ01焼土遺構（第14図、写真図版８）

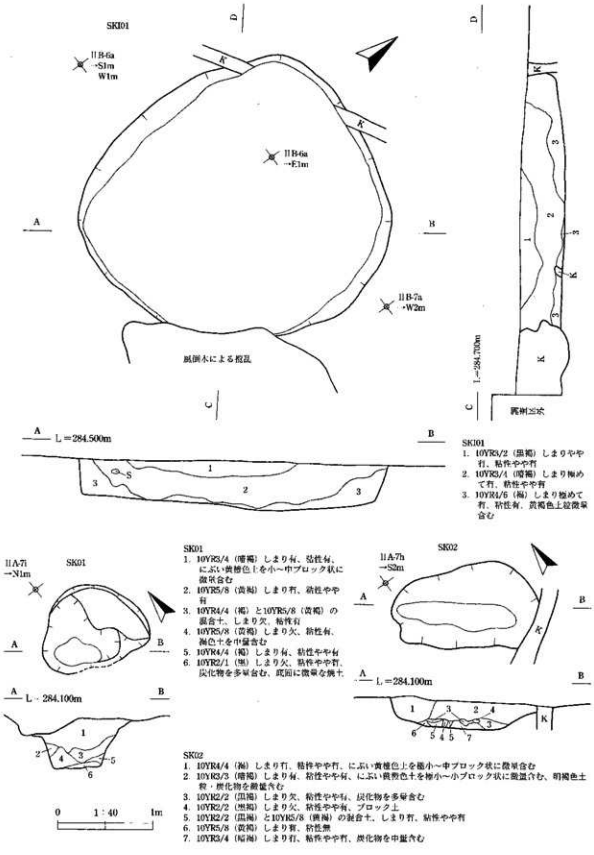
ⅡＢ－４ａグリッドに位置し、Ａ２区のⅡ層下（八戸火山灰層上面）で検出している。規模は23cm×15cmで、不整形を呈しており、焼土の厚さは２～３cmを測る。周囲の土に締まりはなく、遺物は伴っていない。



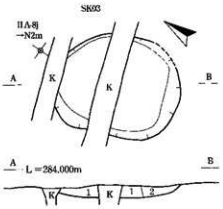
1. 10YR2/2（黒褐）しまり有、粘性有
2. 10YR2/1（黒）しまりやや有、粘性有
3. 10YR2/3（黒褐）しまり欠、粘性有、明黄褐色土粒少量含む
4. 10YR3/2（黒褐）しまりやや有、粘性有
5. 7.5YR5/8（明褐）焼塩焼土ブロック
6. 5YR4/4（赤褐）焼塩焼土ブロック
7. 10YR3/2（黒褐）しまりやや有、粘性やや有
8. 10YR3/3（暗褐）しまり有、粘性有、炭化物少量含む
9. 10YR4/3（にぶい黄褐）しまり有、粘性やや有
10. 10YR4/3（にぶい黄褐）しまり有、粘性やや有、褐色土少量含む
11. 10YR2/1（黒）しまり極めて有、粘性有、炭化物微量含む

SI01 炉跡
1. 10YR3/4（暗褐）しまり極めて有、粘性やや有
2. 5YR5/8（明赤褐）強い焼化焼土

第11図　ＳＩ01竪穴住居

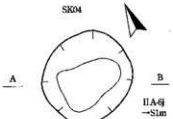


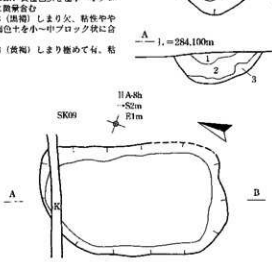
第12図　SKⅠ01竪穴状遺構、SK01・02土坑

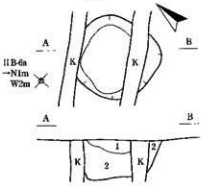


SK03
1. 10YR3/3（暗褐）しまりやや有、粘性やや有、黄褐色土を極小～小ブロック状に微量含む
2. 10YR3/4（暗褐）しまり欠、粘性やや有

SK04
1. 10YR5/8（黄褐）しまり極めて有、粘性無、にぶい黄橙色土を極小～小ブロック状に微量含む
2. 10YR2/3（黒褐）しまり欠、粘性やや有、黄褐色土を小～中ブロック状に含む
3. 10YR5/8（黄褐）しまり極めて有、粘性無

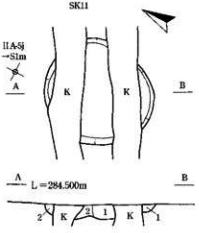






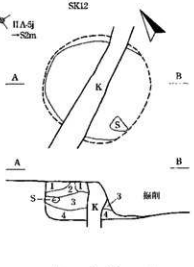
SK05
1. 10YR2/3（黒褐）しまり欠、粘性やや有
2. 10YR3/3（暗褐）しまりやや有、粘性有

SK09
1. 10YR4/4（褐）しまり有、粘性やや有、明黄褐色土を極小～中ブロック状に少量含む
2. 10YR4/4（褐）しまり欠、粘性やや有、明黄褐色土を極小～小ブロック状に微量含む
3. 10YR5/8（黄褐）しまり有、粘性有、褐色土微量混入

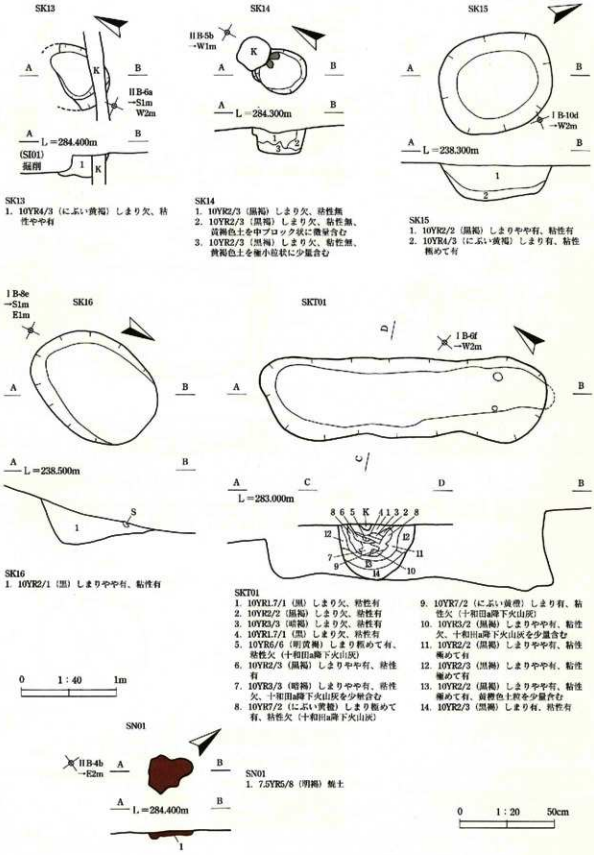


SK11
1. 10YR3/4（暗褐）しまりやや有、粘性やや有、黄褐色土を小ブロック状に微量含む
2. 10YR3/4（暗褐）しまり欠、粘性やや有、黄褐色土を極小～小粒状に含む

SK12
1. 10YR3/4（暗褐）しまり欠、粘性やや有、黄褐色土を極小粒状に微量含む
2. 10YR2/3（黒褐）しまり欠、粘性やや有
3. 10YR3/4（暗褐）しまりやや有、粘性やや有、明黄褐色土を小ブロック状に微量含む
4. 10YR6/8（明黄褐）しまりやや有、粘性やや有、暗褐色土を少量含む



第13図　SK03～05・09・11・12土坑



SK13
1. 10YR4/3（にぶい黄褐）しまり欠、粘性やや有

SK14
1. 10YR2/3（黒褐）しまり欠、粘性無
2. 10YR2/3（黒褐）しまり欠、粘性無、黄褐色土を中ブロック状に微量含む
3. 10YR2/3（黒褐）しまり欠、粘性無、黄褐色土を極小塊状に少量含む

SK15
1. 10YR2/2（黒褐）しまりやや有、粘性有
2. 10YR4/3（にぶい黄褐）しまり有、粘性極めて有

SK16
1. 10YR2/1（黒）しまりややや有、粘性有

SKT01
1. 10YR1.7/1（黒）しまり欠、粘性有
2. 10YR2/2（黒褐）しまり欠、粘性有
3. 10YR3/3（暗褐）しまり欠、粘性有
4. 10YR1.7/1（黒）しまり欠、粘性有
5. 10YR6/6（明黄褐）しまり極めて有、粘性欠（十和田a降下火山灰）
6. 10YR2/3（黒褐）しまりややや有、粘性有
7. 10YR3/3（暗褐）しまりややや有、粘性欠、十和田a降下火山灰を少量含む
8. 10YR7/2（にぶい黄橙）しまり極めて有、粘性欠（十和田a降下火山灰）
9. 10YR7/2（にぶい黄橙）しまり有、粘性欠（十和田a降下火山灰）
10. 10YR3/2（黒褐）しまりやや有、粘性欠、十和田a降下火山灰を少量含む
11. 10YR2/2（黒褐）しまりやや有、粘性極めて有
12. 10YR2/3（黒褐）しまりやや有、粘性極めて有
13. 10YR2/2（黒褐）しまりやや有、粘性極めて有、黄褐色土粒を少量含む
14. 10YR2/3（黒褐）しまり有、粘性有

SN01
1. 7.5YR5/8（明褐）焼土

第14図　SK13～16土坑、SKT01陥し穴、SN01焼土遺構

2．出土遺物

遺物は縄文土器が大コンテナで３箱、石器類が２箱、そのほか土製品、陶磁器類、及び古銭が少数出土している。

(1) 土器

出土した土器の大半は縄文時代中期のもので、円筒上層式と大木８式前後に比類する土器に分かれる。ここでは中期前葉から中葉の円筒系の土器をⅠ群、中期中葉から後葉の大木系の土器をⅡ群とし、後期・晩期に含まれる土器をⅢ・Ⅳ群、弥生土器と思われるものをⅤ群として分類した。また、１点だけであるが前期末葉の円筒下層ｄ式に比類する土器が出土しており、Ⅰ'群とした。そのほか体部文様の技法によって、さらに口縁が残存するものはその形状によって分類を行ってみた。

(時期分類)

Ⅰ'群土器（縄文時代前期末葉の円筒系土器に比類するもの）

Ⅰ群土器（縄文時代中期前葉から中葉の円筒系土器に比類するもの）

Ⅱ群土器（縄文時代中期中葉から後葉の大木系土器に比類するもの）

Ⅲ群土器（縄文時代後期の土器に比類するもの）

Ⅳ群土器（縄文時代晩期の土器に比類するもの）

Ⅴ群土器（弥生土器に比類するもの）

(体部文様技法分類)

a．原体だけのもの

b．隆線が貼付けてあるもの
　　1．隆線に施文や調整が見られないもの
　　2．隆線上に縄文等の施文があるもの
　　3．隆線に調整痕（断面凸状）がみられるもの

c．沈線で文様が描かれるもの

d．沈線で区画文が描かれ、内・外部に地文が充填、もしくは磨消されたもの

e．ヘラ状工具等の刺突があるもの

(口縁部形状分類)

A．(大・小)波状口縁を有するもの
　　1．外反するもの

B．突起を有するもの
　　2．ほぼ垂直なもの

C．平縁なもの
　　3．内反するもの
　　4．キャリパー状のもの

土器は何点かを除いてできるだけ別個体と思われるものを掲載しているが、その中で時期分類のⅡ群に属するものが約70点と最も多く、Ⅰ群が約40点、Ⅳ群が約35点とつづいている。文様の技法でみるとⅠ群の中ではｂ２よりｂ１に分類されるもの、すなわち隆線上に縄文押圧等の施文のあるものより施文のないもののほうが多い。またⅡ群ではｂ３ｃに分類されるもの、すなわち隆沈線で描かれ隆線に調整痕（断面凸状）があるものが多くみられる。口縁部の形状ではⅠ群では突起を有して外反するものが多くみられ、Ⅱ群では波状口縁で外反するものが多くそのうち口縁周りが無文のものが半数近くある。

Ⅲ群に属するものは10点ほどで、文様技法はｃかｄに分類されるもの、すなわち沈線で曲線が描かれるか沈線で区画した中に地文を充填したものである。また口縁が内反するもの（127・181）が出土しているが、

この時期としては青森県の大曲１号遺跡に類例がみられる。Ⅳ群に属するもは約半分がｃに分類され平行沈線文、工字文、変形工字文、入組工字文に類する文様が施文されている。Ⅴ群に属するものは５点でいずれもｃに分類されるが、沈線の描き方がⅣ群のものに比べるとやや雑である。

なお、第４表に示すとおり時期の異なる土器が同じ層から伴出している。これは調査区の現況が長芋畑で、１ｍ前後の深さまで溝状に攪乱を受けているためと、古代以前の地形は調査区の南西側に向かって勾配がきつくなっていて、多くの遺構外土器が東側の丘陵地から土砂と共に流れ込んできたための２つの要因が考えられる。

第４表　遺構外出土土器（掲載土器）の層位と時期分類ごと点数

時期分類		Ⅰ'群	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ類	Ⅴ類	合　計	備　　考
出土層位	Ⅰ層		1	7	2	12	3	25	表土（耕作土）
	Ⅱ層		4	8	4	8		24	旧表土？
	Ⅲ層								十和田ａ降下火山灰層
	Ⅳ層	1	22	27	6	6	2	64	
	Ⅴ層		5	4	1	1		11	
合　計		1	32	46	13	27	5	124	

※時期分類にｏｒや？が付くものは除く

（2）石器

①石鏃

石鏃は13点出土している。凸基有茎のものが11点あり、そのうち４点（185・186・197・198）にタールの付着痕がみられる。石材はいずれも奥羽山脈産の頁岩で、長さの平均は3.5cm、幅は1.4cm、厚さは６mm、重さの平均は2.8ｇである。

②石錐

石錐は１点（187）出土している。石鏃に近い形状をしているが、刃先に錐揉みでできたとみられる線状痕があり石錐として分類した。

③石匙

石匙は３点（184・195・202）出土している。184の刃部は方形、195の刃部は三角形で横型の石匙である。一方、202は刃部が縦型の楕円を呈しており、作りは粗雑である。石材はいずれも奥羽山脈産の頁岩で、長さの平均は4.4cm、幅は3.2cm、厚さは９mm、重さの平均は0.85ｇある。

④石槍

石槍は２点（188・189）出土している。２点とも欠損しており実際の長さ・重さは不明であるが、幅の平均は2.2cm、厚さは1.0cmである。石材には奥羽山脈産の頁岩が用いられている。

⑤削掻器

削掻器は２点（201・203）出土している。201の平面は台形を呈しており、剥片面と刃部以外の部分はほとんど調整加工されていない。203は刃部先端が細くなっており平面形としては石槍に近いが、片面加工のため削掻器として分類した。

⑥磨製石斧

磨製石斧は２点（206・208）出土している。206は片側縁に、208には両側縁に溝状の切り込みがあり擦切石斧と思われる。

⑦凹石・敲石・磨石・石皿

分類上は210が凹石、211が敲石、209が磨石、205が石皿としているが、２種類の使用痕を持つものもある。石材には奥羽山脈産の安山岩（205・209・210）と、北上山地産の石英閃緑岩（211）が用いられている。

⑧その他

異形石器が１点（183）、半円状の石器が１点（207）出土している。石材は異形石器が奥羽山脈産の頁岩で、半円状の石器が同じく奥羽山脈産の安山岩である。

その他に、大きさ0.5～6.5cm程度の石材の剥片が数点出土している（第５表参照）。

第５表　剥片出土地点及び点数　　※大きさは長さ×幅

出土地点	層　位	点　数	大きさ		総量(g)	石　質
			最大(cm)	最小(cm)		
ＳＩ01	埋土上位～下位	８０	6.5×3.3	0.9×0.6	124.60	頁岩
ＳＫＩ01	埋土上・中位	１７	4.8×2.9	1.6×0.9	48.98	頁岩
ＳＫ12	埋土中位	９	4.4×2.8	0.9×0.5	9.98	頁岩
ＳＫ13	埋土中位	２	1.6×1.3	1.5×1.3	0.75	頁岩
Ａ　区	Ⅰ層～Ⅳ層	１６	4.4×4.2	1.6×1.5	106.60	頁岩
Ｂ　区	Ⅳ層	１０	5.1×4.2	1.7×0.6	7.00	頁岩

（3）土製品

土偶の破片（下肢部？）と思われるものが１点（213）、環状のものが１点（214）出土している。213には片面に文様のような刻みがある。214は外輪の一部に膨らみがあり、耳のような形状をしている。

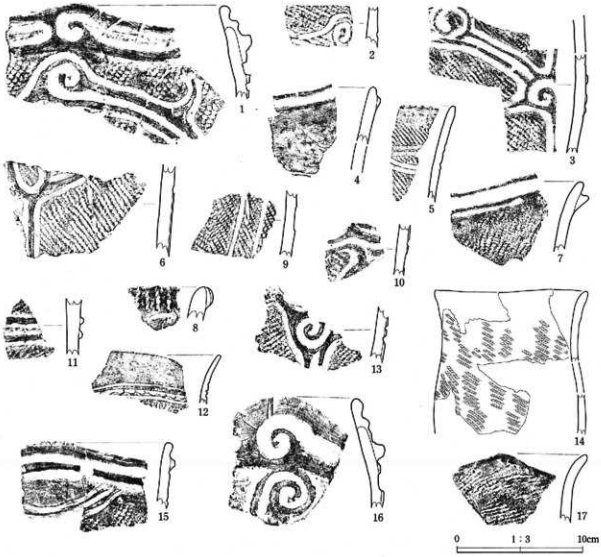
（4）その他の遺物

①須恵器・磁器

須恵器（215）は破片で１点しか出土しておらず器種・時期ともに不明である。磁器（216）にはコンニャク印判があり18世紀の肥前産の碗で、217も同じ頃の碗と思われる。

②古銭

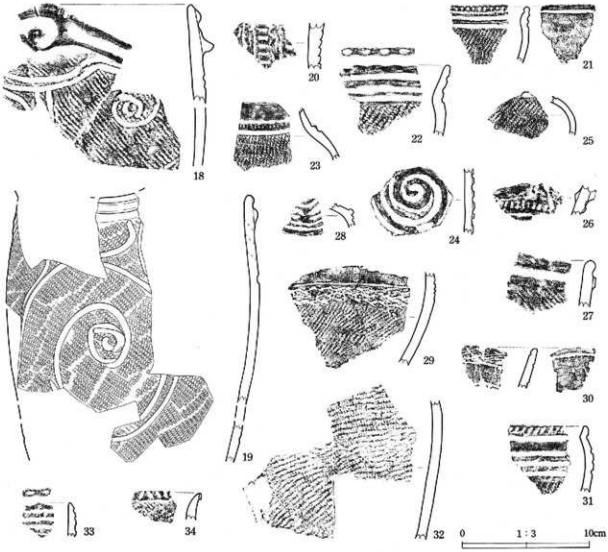
出土した古銭は８枚（218～223、221は三枚組）で、いずれも寛永通宝である。そのうち７枚が銅製、１枚が鉄製である。銅製のもの１枚（220）は「寛」及び「寶」の字の特徴から17世紀中頃の製造（古寛永）、また２枚（219・221）には背に「文」の字があり17世紀後半頃の製造と考えられる。一方、鉄製の寛永通宝（223）は18世紀以降の製造と思われる。



土器観察表 1

No.	出土地点	層位	器種	部位	原体	方向	文様の特徴	分類	
								口縁	胴・底
1	SI01	埋土上位	深鉢	口縁～体部	RL	縦	波状口縁、口縁部隆沈線（渦巻文）、体部隆沈線（渦巻文・有爪）	A3	II b3c
2	SI01	埋土上位	深鉢？	体部	RL	横	沈線（渦巻文）		II d
3	SI01	埋土上位	深鉢	体部	LR	縦	隆沈線（渦巻文・有爪・懸垂文）		II b3c
4	SI01	埋土上位	深鉢	口縁			波状口縁、隆線、口縁下無文	A1	II
5	SI01	埋土上位	小深鉢	口縁～体部	LR	縦	波状口縁？、口縁部無文、体部沈線（横位）	A?1	II d
6	SI01	埋土上位	深鉢	体部	LR	縦	隆沈線（懸垂文）		II b3c
7	SI01	埋土上位	深鉢	口縁	RL	縦	波状口縁、隆沈線	A1	II
8	SI01	埋土上位	深鉢	口縁			口縁回り刻目（縄文圧痕）	?	I
9	SI01	埋土中位	深鉢	体部	RL	横	沈線（縦位）		II d
10	SI01	埋土中位	深鉢	体部	摩滅		隆沈線		II b3c
11	SI01	埋土中位	深鉢	体部	摩滅		隆線（横位）		I b1
12	SI01	埋土中位	小深鉢	口縁～頸部			波状口縁、口縁部無文、頸部沈線・刺突列	A1	II ce
13	SI01	埋土中位	深鉢	体部	RL	縦	隆沈線（渦巻文）、原体圧痕		II b3c
14	SI01	埋土中位	小深鉢	口縁～体部	LR	縦	口縁部無文	C1	I a
15	SI01	埋土中位	深鉢	口縁～体部	RL	縦	波状口縁、口縁部隆沈線、体部隆沈線（横位）	A1	II b1c
16	SI01	埋土中位	深鉢	口縁～体部	摩滅		波状口縁（波状部）、口縁部隆沈線（渦巻文）、体部隆沈線（渦巻文）	A3	II b3c
17	SI01	埋土下位	深鉢	口縁～体部	Lr？	横	波状口縁（波状部）、無文、原体半段？SI01遺構間のRP1	A1	I a?

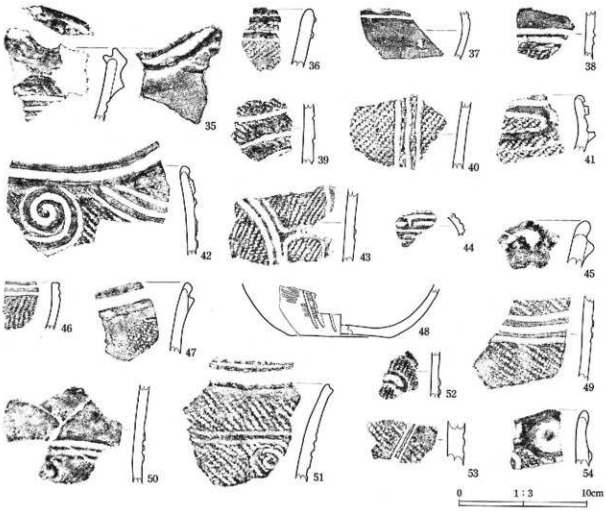
第15図　遺物図版1



土器観察表 2

No.	出土地点	層 位	層 種	部 位	原体	方向	文 様 の 特 徴	分 類	
								口縁	胴・底
18	S101	埋土中位	深鉢	口縁～体部	RL	横	波状口縁（鉢形）、口縁部隆沈線（猫巻文）、体部沈線（猫巻文）	A3	Ⅱd
19	S101	埋土中位	深鉢	口縁～体部	RL	横	波状口縁、口縁部隆沈線、体部沈線（猫巻文）、18と同一個体	A2	Ⅱd
20	S101	埋土下位	深鉢	体部			隆線（胴弁文?）、ヘラ状工具の刺突		Ⅰb1e
21	S101	覆乱層	鉢	口縁	RL	縦	口縁直下刻目（波状）、沈線（平行沈線文）	C2	Ⅳc
22	SK05	埋土上位	鉢	口縁	RL	縦	小波状口縁、沈線（平行沈線文）	C2	Ⅳc
23	SK12	埋土中位	壺	頸部	LR	横	沈線（平行沈線文・間に刺突列）		Ⅳce
24	SK13	埋土中位	深鉢	体部			隆沈線（猫巻文）		Ⅱb3c
25	SK13	覆乱層	壺	体部	LR	横	沈線		Ⅳc
26	SK16	埋土上位	深鉢	頸部			隆線（横位）、小突起、ヘラ状工具の刺突列		Ⅰb3e
27	SK16	埋土中位	深鉢	口縁	RL	横	波状口縁、隆沈線	A2	Ⅱ
28	T2	Ⅰ層	壺	肩部			沈線（平行沈線文・間に小突起）		Ⅳc
29	T3	Ⅰ層	鉢	体部	LR	横、斜	沈線（蕨巻状文?）		Ⅴc
30	T3	Ⅰ層	鉢？	口縁	LR	横	波状口縁?、沈線区画（磨消縄文）	A?1	Ⅲd
31	T3	Ⅰ層	鉢	口縁～頸部	LR	横	口縁周り刻目（斜位）、頸部沈線（平行沈線文）	C2	Ⅳc
32	T3	Ⅰ層	深鉢	体部	LR	横			Ⅰ?a
33	T4	Ⅰ層	鉢	口縁			小波状口縁、沈線（平行沈線文）	A2	Ⅳc
34	T6	Ⅳ層	小深鉢？	口縁	LR	横	口縁周り刻目（縄文圧痕?）	C?2	Ⅰa2

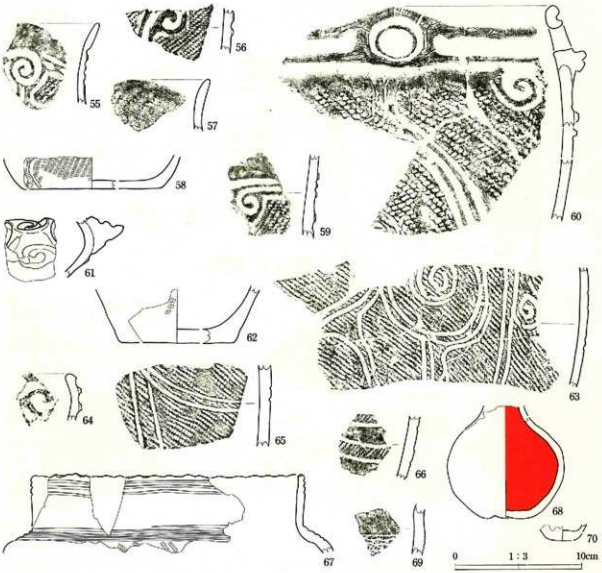
第16図　遺物図版2



土器観察表 3

No.	出土地点	層位	器種	部位	原体	方向	文様の特徴	分類 口縁	分類 胴・底
35	T6	II層	深鉢	口縁～頸部	LR	縦	口縁突起（棒状貼付）、頸部沈線（横位羽文）	B1	IIe
36	T6	IV層	深鉢	口縁	RL	縦	隆線（横位）	C71	Ibt
37	T7	II層	鉢	体部			沈線（横位）		IVe
38	T7	II層	小深鉢	頸部	RL	縦	口縁下圧痕文、沈線（横位羽文）		IIe
39	A1	I層	深鉢	体部	RL	横	沈線、磨消？		IIbc
40	A1	IV層	深鉢	体部	RL	縦	沈線（懸垂文）、原体複節		IIe
41	A1	IV層	鉢？	口縁	RL	縦	キャリパー状、隆沈線	C74	IIbde
42	A1	IV層	深鉢	口縁～体部	LR	縦	波状口縁、口縁部隆沈線、体部隆沈線（渦巻文-鋸歯文）	A3	IIbde
43	A1	IV層	深鉢	体部	RL	縦	隆沈線（懸垂文）、原体複節		IIbde
44	A1	IV層	壺	頸部			沈線（平行沈線文-工字文）		IVc
45	A1	IV層	深鉢	口縁	撚糸		波状口縁（波頂部）、隆沈線（鋸歯文）	A1	II
46	A1	IV層	鉢	口縁	RL	縦	沈線（平行沈線文）	C2	IVe
47	A1	IV層	深鉢	口縁	RL	縦	波状口縁、隆沈線	A1	II
48	A1	IV層	深鉢	底部	RL	横	沈線（懸垂文）		IIe
49	A1	IV層	深鉢	体部	RL	横	隆沈線（横位）		IIbde
50	A1	IV層	小深鉢	口縁～体部	撚糸	縦	波状口縁、口縁部粗文、頸部隆沈線（横位羽文）、体部隆沈線（鋸歯文）	A1	IIbde
51	A1	IV層	深鉢	口縁～体部	LR	縦	波状口縁、口縁部に消、頸部沈線（横位羽文）、体部沈線（鋸歯文）	A1	IIe
52	A1	IV層	小深鉢	体部	RL	縦	隆線（弧状文）		IIbt
53	A1	IV層	深鉢	体部	RL	横	沈線（斜位）		IIe
54	A1	IV層	深鉢	口縁	LR	縦	波状口縁（波底部）、隆沈線	A1	II

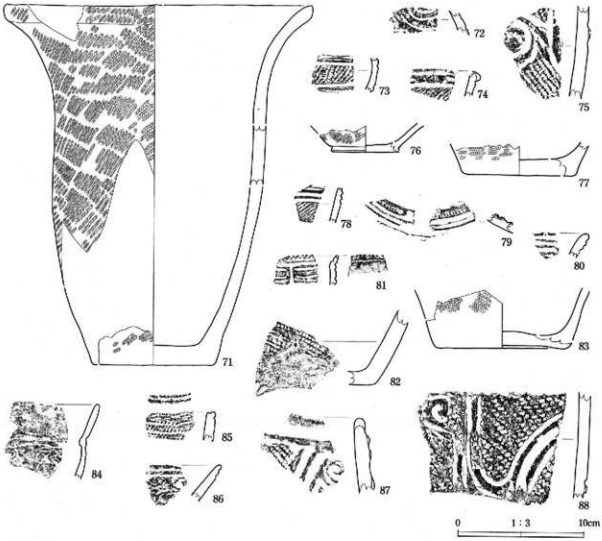
第17図　遺物図版3



土器観察表 4

No.	出土地点	層位	器種	部位	部体	方向	文様の特徴	分類 口縁	分類 時・段
55	A1	Ⅳ層	小深鉢	口縁～体部	RL	縦	波状口縁、口縁部無文、胴部隆沈線（刺突列・渦巻文）、体部隆沈線（懸垂文）	A1	Ⅱb3dce
56	A1	Ⅳ層	深鉢	体部	RL	縦	隆沈線（渦巻文・懸垂文）、原体痕跡		Ⅱb3c
57	A1	Ⅳ層	深鉢	口縁			波状口縁、無文	A1	Ⅱ
58	A1	Ⅳ層	深鉢	底部	RL	縦	沈線（懸垂文）、原体圧部		Ⅱc
59	A1	Ⅳ層	小深鉢	頸部	RL	縦	隆沈線（横位線文・渦巻文）		Ⅱb3c
60	A1	Ⅳ層	深鉢	口縁～体部	LR	縦	口縁部隆沈線（有孔）、体部隆沈線（曲流文・渦巻文）	B3	Ⅱb3c
61	A1	Ⅳ層	深鉢	口縁			キャリパー状、突起（渦巻文）	B4	Ⅱ
62	A1	Ⅳ層	深鉢？	底部	RL	縦	原体圧部		Ⅰ or Ⅱ?
63	A1	Ⅳ層	深鉢	体部	LR	縦	沈線（渦巻文・懸垂文）		Ⅱc
64	A1	Ⅳ層	小深鉢	口縁			波状口縁（波頂部）、隆沈線（渦巻文）	A?3	Ⅱb3c
65	A1	Ⅳ層	深鉢	体部	LR	縦	沈線（懸垂文・曲流文?）		Ⅱc
66	A2	Ⅰ層	鉢？	体部	LR	横	沈線区画（渦巻風文）		第Ⅵ
67	B4	Ⅳ層	甕	口縁～頸部	RL	斜	小波状口縁、口縁部沈線（平行沈線文）、頸部沈線（平行沈線文）	A2	Ⅴc
68	ⅡB-5a	Ⅰ層	小壺	体部～底部			両面に赤色顔料塗		N?
69	A1K	Ⅰ層	鉢？	頸部		横、斜	沈線（鋸歯状文?）、29と同一個体?		Ⅴc
70	A1K	Ⅰ層	ミニチュア	底部					N?

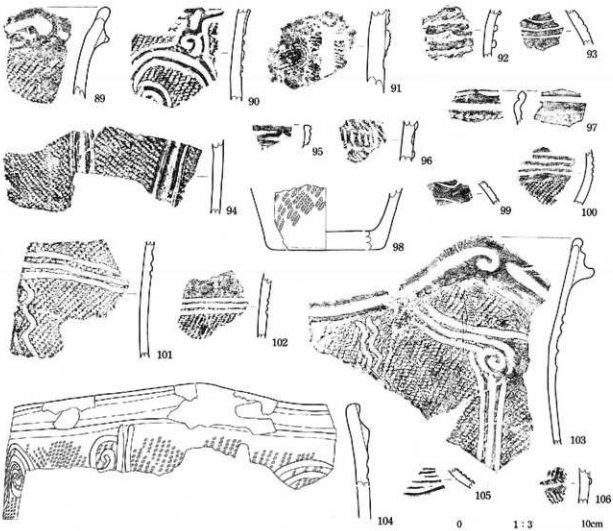
第18図　遺物図版4



土器観察表 5

No.	出土地点	層位	器種	部位	整体	方向	文様の特徴	分類	
								口縁	時・柱
71	ⅡB-1c	Ⅳ層	深鉢	口縁～底部	LR	横		C1	Ⅰa
72	A区	Ⅰ層	壺	肩部			沈線（曲線文）		Ⅲc
73	A区	Ⅰ層	鉢？	体部	LR	横	沈線区画?		Ⅳd?
74	A区	Ⅰ層	浅鉢	頸部	RL	縦	沈線（平行沈線文、間に小突起）		Ⅳc
75	A区	Ⅰ層	深鉢	体部	LR	縦	隆沈線（渦巻文）		Ⅱb3c
76	A区	Ⅰ層	浅鉢？	底部	LR	横			Ⅳa?
77	A区	Ⅰ層	深鉢？	底部	LR	横			Ⅰ or Ⅱ?
78	A区	Ⅰ層	鉢？	体部	LR	横	沈線（平行沈線文）		Ⅳc
79	A区	Ⅰ層	壺	肩部			隆沈線（平行沈線文・工字文・間に刺突列）		Ⅳb3ce
80	A区	Ⅰ層	壺？	口縁			沈線（平行沈線文・工字文）	C1	Ⅳc
81	A区	Ⅰ層	鉢？	口縁			口唇部に刻目（縄位）、沈線（平行沈線文・工字文）	C2	Ⅳc
82	A区	Ⅰ層	深鉢？	底部	RL	横			Ⅰ or Ⅱ?
83	A区	Ⅰ層	深鉢	底部	RL	横			Ⅰ or Ⅱ?
84	A区	Ⅰ層	鉢？	口縁～体部			沈線?（摩滅により文様不明瞭）	C1	Ⅳ?c
85	A区	Ⅰ層	鉢？	口縁	LR	横	口唇部に沿一周刻目（斜位）、沈線（縄位）、刺突列	C1	Ⅳce
86	A区	Ⅰ層	浅鉢？	口縁			沈線（平行沈線文）	C1	Ⅳ?c
87	A区	Ⅰ層	深鉢	口縁～体部	LR	縦	口縁部隆沈線、体部隆沈線（渦巻文）	A3	Ⅱb3c
88	A区	Ⅰ層	深鉢	体部	LR	縦	隆沈線（渦巻文・懸垂文）		Ⅱb3c

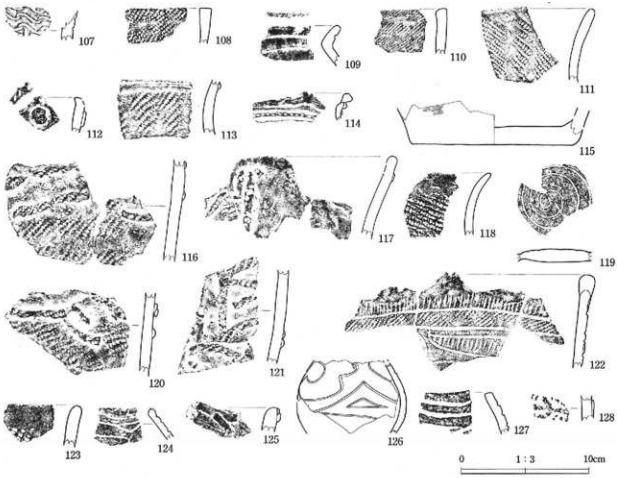
第19図　遺物図版5



土器観察表 6

No.	出土地点	層位	器種	部位	原体	方向	文様の特徴	分類	
								口縁	胴・底
89	AEK	I層	深鉢	口縁	RL	縦	波状口縁（波頂部）、隆沈線（渦巻文）、原体複節	A1	II
90	AEK	II層	深鉢	体部	RL	縦	隆沈線（渦巻文）		IIb3c
91	AEK	II層	深鉢	体部			隆線（胴幹文？・上に縄文施文）、原体の折曲げ圧痕		I b2
92	AEK	II層	深鉢	体部	LR	横	隆線（横位線文？）		I b1
93	AEK	II層	壺？	肩部			沈線（楕円文）、72と同一個体		IIc
94	AEK	II層	深鉢	体部	LR	縦	隆沈線（懸垂文）		IIb3c
95	AEK	II層	鉢？	口縁			沈線（変形工字文？）	C2	IVc
96	AEK	II層	深鉢	体部			隆線（上に縄文施文・頂にヘラ状工具の刺突列）		I b2c
97	AEK	II層	鉢	口縁			小波状口縁、口唇に溝、沈線（横位）、刺突列（横位）	A1	IVc
98	AEK	II層	小深鉢	底部	LR	横			I or II？
99	AEK	II層	壺	肩部			沈線（楕円文）		IIc
100	AEK	II層	鉢	体部	RL	縦	沈線（平行沈線文）		IVc
101	AEK	II層	深鉢	体部	RL	縦	沈線（波状懸垂文）、原体複節、103と同一個体		IIc
102	AEK	II層	小深鉢	頸部	RL	縦	沈線（横位線文）、原体複節		IIc
103	AEK	II層	深鉢	口縁～体部	RL	縦	波状口縁、口縁部隆沈線（渦巻文）、体部沈線（渦巻文・波状懸垂文）、複節	A1	IIc
104	AEK	II層	深鉢	口縁～体部	RL	縦	口縁部隆沈線（渦巻文？）、体部沈線（渦巻文・懸垂文）、原体複節	A3	IIc
105	AEK	II層	壺	肩部			隆沈線（平行沈線文）		IVc
106	AEK	II層	鉢？	体部	LR	縦	隆線（上に縄文施文）、ヘラ状工具の刺突列		I b2c

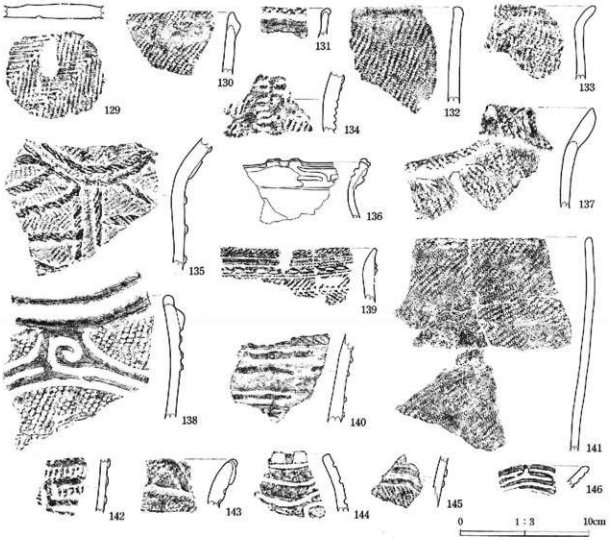
第20図　遺物図版6



土器観察表 7

No.	出土地点	層位	器種	部位	原体	方向	文様の特徴	分類 口縁	分類 時・後
107	A区	Ⅳ層	深鉢？	体部			胴部?		Ⅰ?
108	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁	LR	横	波状口縁?	A?1	Ⅰa?
109	A区	Ⅳ層	壺	口縁～頸部			沈線（横位）	C1	Ⅳc
110	A区	Ⅳ層	鉢？	口縁	Lr？	横	波状口縁, 原体圧痕?	C2	Na?
111	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁	LR	横	波状口縁, 原体合禮	A1	Ⅰa
112	A区	Ⅳ層	深鉢？	口縁			口縁突起, 口唇部に刻目（斜位）, 突起下に沿行（円形）	B2?	Ⅰ?
113	A区	Ⅳ層	深鉢？	頸部	RL	縦	隆線（縦位）		Ⅱb1
114	A区	Ⅳ層	鉢	口縁			小波状口縁, 口縁突起, 沈線（平行沈線文, 間に刺突列）	A1	Ⅳce
115	A区	Ⅳ層	深鉢？	底部	LR	横			Ⅰ or Ⅱ?
116	A区	Ⅳ層	深鉢	体部	RL	縦	隆線（横位・上に縄文施文）		Ⅰb2
117	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁～体部			口縁突起, 隆線（横位・上に縄文施文）	B1	Ⅰb2
118	A区	Ⅳ層	小深鉢？	口縁	RL	横	波状口縁?, 無文	C1	Ⅱ?
119	A区	Ⅳ層	壺？				沈線（渦巻状）		Ⅴc
120	A区	Ⅳ層	深鉢	体部	LR	横	隆線（横位・上に縄文施文）		Ⅰb2
121	A区	Ⅳ層	深鉢	体部			隆線（斜行文・上に無文施文）		Ⅰb2
122	A区	Ⅳ層	鉢	口縁～体部	LR	横	口縁突起, 口縁部無目帯, 体部沈線区画（地文充填・無目）	B1	Ⅲd
123	A区	Ⅳ層	深鉢？	口縁	摩滅		波状口縁?, 口縁無文	C1	Ⅱ?
124	A区	Ⅳ層	壺	頸部			沈線（由線文）, 99と同一個体		Ⅲc
125	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁			口縁突起部?, 隆線（横位）	B1	Ⅰb1
126	A区	Ⅳ層	壺	体部			沈線（由線文）, 99・124と同一個体		Ⅲc
127	A区	Ⅳ層	壺？	口縁			沈線	C3	Ⅲc
128	A区	Ⅳ層	深鉢？	体部			隆線（上に無文施文）, ヘラ状工具の刺突列		Ⅰb2e

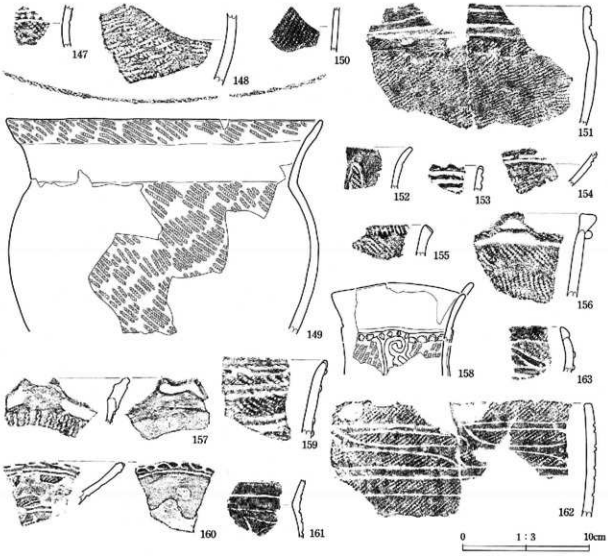
第21図　遺物図版7



土器観察表 8

No.	出土地点	層位	器種	部位	原体	方向	文様の特徴	分類	
								口器	時・技
129	A区	Ⅳ層	深鉢	底部			底面に付加状刷網文		1 or Ⅱ？
130	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁	LR	横	隆線（撚糸）	C2	1 a2
131	A区	Ⅳ層	鉢？	口縁			口唇部縄文押圧	C2	Ⅳ
132	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁～体部	RL	縦		C2	1 a
133	A区	Ⅳ層	小深鉢	口縁～体部	RL	縦		C1	1 a
134	A区	Ⅳ層	深鉢	胴部			隆線（撚糸）、ヘラ状工具の刺突列（縦・横）		1 b1e
135	A区	Ⅳ層	深鉢	胴部	LR	横	隆線（胸骨文・上に結束縄文）		1 b2
136	A区	Ⅳ層	鉢	口縁			口縁小突起、器北線（変形工字文）、口唇面に平行沈線	B1	Ⅳb3c
137	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁～体部	RL	横	口縁突起、原体複節	B1	1 a
138	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁～体部	RL	縦	波状口縁、口縁部隆線、体部隆沈線（渦巻文・曲線文）	A3	Ⅱb3c
139	A区	Ⅳ層	鉢	口縁			隆線（上に刺突列）、羽織文、縁上に編線	C2	Ⅰ'b3e
140	A区	Ⅳ層	深鉢	体部	摩滅		隆線（撚糸線文）		1 b1
141	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁～体部	LR	横		C2	1 a
142	A区	Ⅳ層	深鉢	体部			隆線（胸骨文）、ヘラ状工具の刺突列（縦位・横位）		1 b1e
143	A区	Ⅳ層	深鉢	口縁	LR？	横？	隆線（波形文・上に羽織文縁文）、刺突列	B1	1 b2e
144	A区	Ⅳ層	壺？	口縁			沈線、127と同一個体	C3	Ⅱc
145	A区	Ⅳ層	小深鉢	体部	LR	縦	隆線（横位）、原体合撚？		1 b1
146	A区	Ⅳ層	壺？	口縁～頸部			沈線（平行沈線文・入組工字文？）	C1	Ⅳc

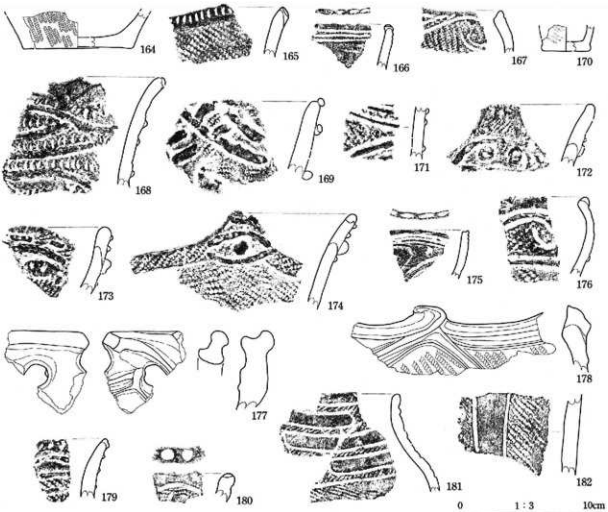
第22図　遺物図版8



土器観察表 9

No.	出土地点	層位	器種	部位	原体	方向	文様の特徴	分類	
								口縁	胴・底
147	A区	表採	小深鉢	頸部	LR	縦	沈線（四に刺突列）		IIce
148	A区	表採	深鉢？	体部	LR	横	原体合撚？		I or II？
149	A区	表採	壺	口縁～体部	RL	横	猫爪風文帯、口縁部縄文施文	C1	V
150	A区	撹乱層	鉢？	体部	LR	横			IV？
151	A区	撹乱層	鉢	口縁～体部	Lr	横、斜	沈線（横位）、原体単段	C2	Vc
152	A区	撹乱層	小深鉢？	口縁～体部	RL	横	口縁部無文、体部沈線区画（地文充填）	C1	IId
153	A区	撹乱層	鉢	口縁			小波状口縁、沈線（平行沈線文）	A2	IVc
154	B区	I層	底？	体部	LR？	横？	沈線（平行沈線文）		IVc
155	B区	I層	深鉢？	口縁	RL	横	口縁刻り刻目（屈位）	C7i	I 7a
156	B区	I層	深鉢	口縁～体部	RL？	横？	口縁突起、突起部下膨み状の張付	B1	I a
157	B区	I層	深鉢	口縁			口縁突起、沈線、磨消押圧（屈位）	B1	II
158	B区	II層	小深鉢	口縁～体部	RL	縦	口縁部無文、胴部隆起線（隆線上に刺突列）、体部隆沈線（鋸歯文）	A1	IIb3ce
159	B区	II層	深鉢	口縁～体部	LR	縦	隆線（蛇行縄文）	B7i	I b1
160	B区	II層	皿	口縁			口唇内側に刻目（斜位）、沈線、磨消縄文	C1	IVcd
161	B区	II層	鉢？	頸部	摩滅		沈線		IIIc
162	B区	II層	鉢	口縁～体部	LR	横	口縁突起、沈線区画（地文充填）	C2	IIId
163	B区	IV層	小深鉢？	口縁	RL	横	キャリパー状、隆線（横位）	C4	IIb1

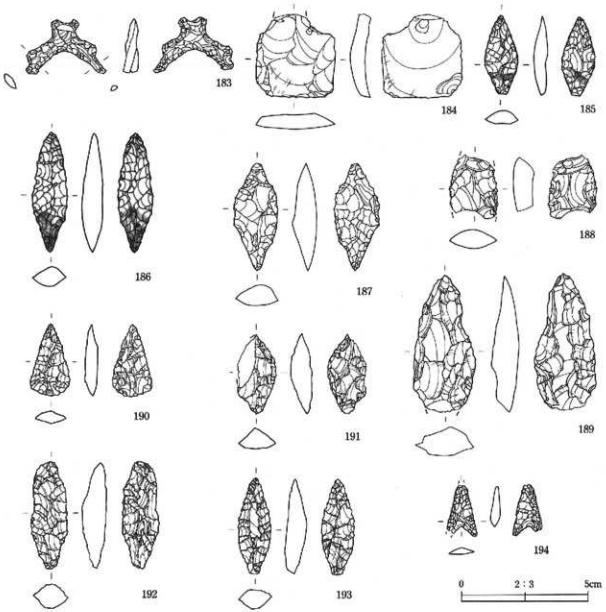
第23図　遺物図版9



土器観察表 10

No.	出土地点	層位	器種	部位	原体	方向	文様の特徴	分類 口縁	分類 胴・底
164	B区	Ⅳ層	深鉢	底部	LR	縦			Ⅰ?
165	B区	Ⅳ層	深鉢	口縁	RL	横	波状口縁、口縁周り肩目（縦位）、原体痕跡	A1	Ⅰa
168	B区	Ⅳ層	鉢?	口縁			小波状口縁、沈線（平行沈線文）	A1	Ⅳc
167	B区	Ⅳ層	小深鉢?	口縁	LR	縦	沈線（渦巻文）、原体痕跡	C3	Ⅱc
168	B区	Ⅳ層	深鉢	口縁～胴部	摩滅		波状口縁、隆線（横位）、隆線間にヘラ状工具の刺突	B?1	Ⅰb1e
169	B区	Ⅳ層	深鉢	口縁	RL	横	口縁突起部、隆線	B1	Ⅰb1
170	B区	Ⅴ層	ミニチュア	底部	摩滅				Ⅳ?
171	B区	Ⅴ層	深鉢	体部	摩滅		隆線（横位）		Ⅰb1
172	B区	Ⅴ層	深鉢	口縁	RL	縦	口縁突起部、突起下円形の刺付2つ、隆線	B1	Ⅰb1
173	B区	Ⅴ層	深鉢	口縁	LR?	横?	口縁突起部、突起部下つまみ状の刺付、隆線	B1	Ⅰb1
174	B区	Ⅴ層	深鉢	口縁～胴部	RL?	横?	口縁突起、突起下円形状の刺付、隆線	B1	Ⅰa
175	B区	Ⅴ層	浅鉢?	口縁			小波状口縁、沈線（平行沈線文）、磨消縄文（渦巻文?）	A1	Ⅳed
176	B区	Ⅴ層	小深鉢?	口縁～胴部			口縁キャリパー状、隆沈線	C3	Ⅱb3c
177	B区	Ⅴ層	深鉢	口縁			口縁粘手状突起部	B1?	Ⅱ
178	B区	Ⅴ層	深鉢	口縁	RL	横	波状口縁、小突起、隆沈線	B3	Ⅱb3c
179	B区	Ⅴ層	深鉢	口縁～体部	RL	横	口縁周り肩目（懸垂押圧?）、沈線（横位施文）	C?1	Ⅰb1
180	B区	Ⅴ層	深鉢?	口縁			口縁突起部、沈線	B1	Ⅰc?
181	B区	Ⅴ層	壺	口縁～胴部			沈線区画（地文充填）	C2	Ⅲd
182	B区	Ⅴ層	深鉢	体部	RL	横	沈線区画（地文充填）		Ⅱd

第24図　遺物図版10

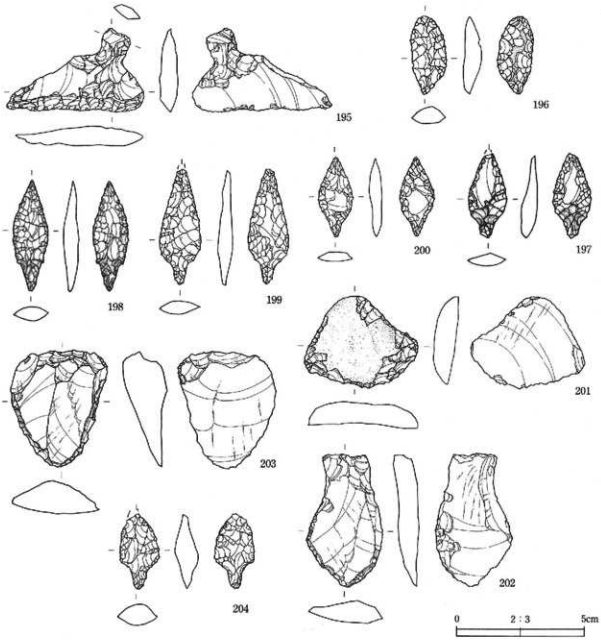


石器観察表 1

※（ ）は欠損部の値

No.	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴等	石材	産地
183	SI01	埋土上位	異形石器				1.45		頁岩	奥羽山脈
184	SI01	埋土上位	石匙	(3.3)	3.1	0.8	8.38	茎部欠損	頁岩	奥羽山脈
185	SI01	埋土中位	石鏃	3.1	1.3	0.6	2.30	凸基有茎、タール痕	頁岩	奥羽山脈
186	SI01	埋土下位	石鏃	4.8	1.4	0.8	4.29	凸基有茎、タール痕	頁岩	奥羽山脈
187	SI01	埋土下位	石錐	4.3	1.8	1.0	5.27		頁岩	奥羽山脈
188	SK001	埋土上位	石錐	(2.6)	1.9	0.8	4.33	刃先・茎部欠損	頁岩	奥羽山脈
189	SK01	埋土中位	石槍	(5.4)	2.4	1.1	12.42	茎部欠損	頁岩	奥羽山脈
190	SK12	埋土中位	石鏃	2.9	1.6	0.5	1.83	円基	頁岩	奥羽山脈
191	T8	Ⅳ層	石鏃	2.2	(1.5)	0.9	3.06	凸基有茎、刃部欠損	頁岩	奥羽山脈
192	A1	Ⅱ層	石錐	4.3	1.5	1.0	5.04	凸基有茎	頁岩	奥羽山脈
193	A1	Ⅱ層	石錐	3.8	1.3	0.9	3.22	凸基有茎	頁岩	奥羽山脈
194	A区	Ⅰ層	石錐	(2.1)	1.2	0.4	0.62	凹基無茎、一部欠損	頁岩	奥羽山脈

第25図　遺物図版11

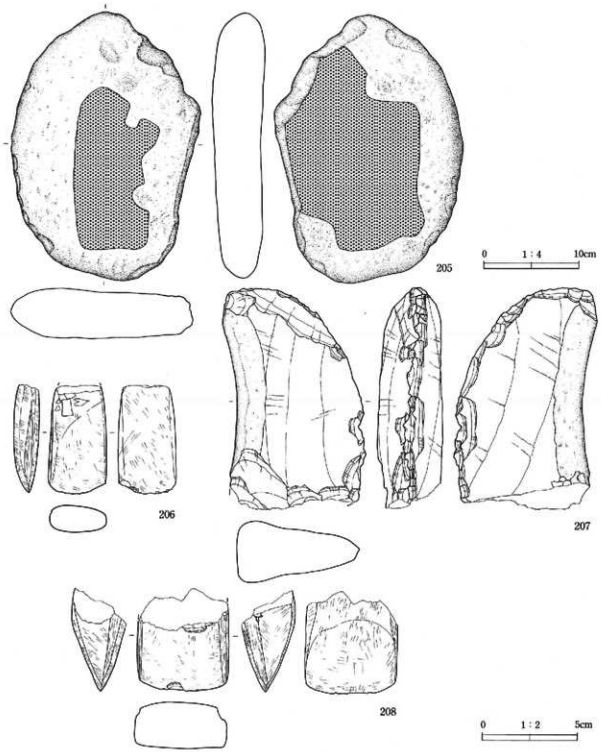


石器観察表 2

※（ ）は欠損部の値

No.	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴等	石材	産地
195	AIX	I層	石匙	5.5	3.3	0.9	9.98		頁岩	奥羽山脈
196	AIX	I層	石鏃	3.2	1.4	0.7	2.83	凸基有茎	頁岩	奥羽山脈
197	AIX	II層	石鏃	(3.4)	1.5	0.6	2.47	凸基有茎、刃先欠損、タール痕	頁岩	奥羽山脈
198	AIX	IV層	石鏃	4.4	1.4	0.6	2.85	凸基有茎、タール痕	頁岩	奥羽山脈
199	AIX	IV層	石鏃	(4.6)	1.6	0.8	3.74	凸基有茎、刃先欠損	頁岩	奥羽山脈
200	AIX	IV層	石鏃	3.2	1.3	0.5	1.67	凸基有茎	頁岩	奥羽山脈
201	AIX	IV層	剥片剥離	3.7	4.5	1.1	16.01		頁岩	奥羽山脈
202	AIX	IV層	石匙	5.2	3.0	1.0	13.43	粗製石匙	頁岩	奥羽山脈
203	BIX	IV層	剥離剥離	4.7	3.9	1.8	24.70		頁岩	奥羽山脈
204	BIX	IV層	石鏃	(3.6)	1.6	0.9	2.63	凸基有茎、刃先欠損	頁岩	奥羽山脈

第26図　遺物図版12

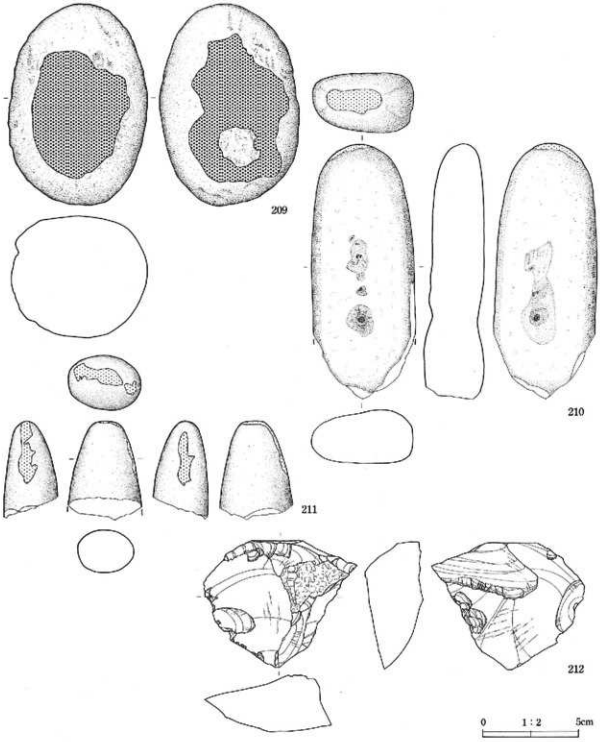


石器観察表 3

※（ ）は欠損部の値

No.	出土地点	器 位	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特 徴 等	石 材	産 地
205	SI01	床面	石皿	28.4	19.7	5.4	4097.00	SI01遺構図のS1	安山岩	奥羽山脈
206	SI01	覆土層	磨製石斧	(5.8)	3.0	1.4	42.76	片側縁に溝状切り込み(擦切石斧)	頁岩	北上山地
207	SK12	覆土層	その他	(11.7)	7.1	3.4	370.00	半円形扁平打製石斧？,一部欠損	安山岩	奥羽山脈
208	A区	Ⅳ層	磨製石斧	(5.5)	4.7	2.8	98.64	両側縁に溝状切り込み(擦切石斧)	頁岩	北上山地

第27図　遺物図版13

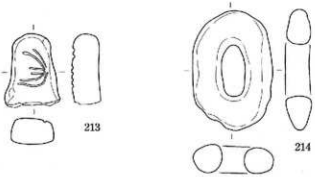


石器観察表 4

※（ ）は欠損部の値

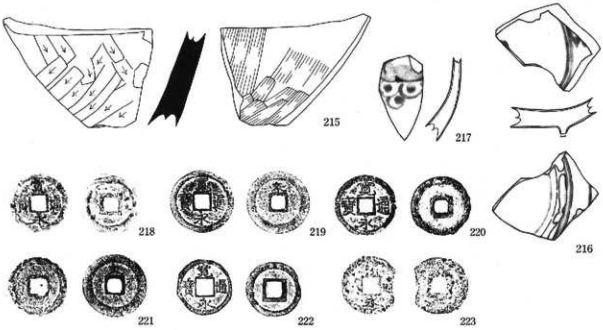
No.	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴等	石材	産地
209	AIX	埋土中位	磨石	10.7	7.3	6.4	724.00		安山岩	奥羽山脈
210	SKI01	埋土中位	凹石	(13.5)	5.4	3.2	294.48	一部欠損	安山岩	奥羽山脈
211	BIX	Ⅳ層	敲石	(5.2)	3.8	3.8	71.80	一部欠損	石英閃緑	北上山地
212	BIX	Ⅳ層	石核	6.8	8.0	3.0	138.22		頁岩	奥羽山脈

第28図　遺物図版14



土製品観察表

No.	出土地点	層位	種類	幅 (cm)	厚 (cm)	厚さ (cm)	特徴等
213	AⅠ区	Ⅳ層	土製品	－	－	－	土偶の下肢部？
214	AⅠ区	撹乱層	土製品	4.7	3.1	1.1	環状土製品



須恵器・磁器・古銭観察表

※（ ）は欠損部の値

No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	外面調整	内面調整	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴等
215	CⅠ区	Ⅰ層	須恵器	甕？	体部	ヘラケズリ	ヘラナデ	－	－	－	

No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	底径 (cm)	高さ (cm)	釉薬等	産地	特徴等	時期
216	AⅠ区	Ⅰ層	磁器	碗	底部	－	－	染付	肥前	コンニャク印刻	18c
217	BⅠ区	Ⅰ層	磁器	碗	体部	－	－	染付	肥前		18c

No.	出土地点	層位	種類	銭種	径 (cm)	重量 (g)	特徴等
218	SK14	埋土下位	古銭	寛永通宝	2.2	2.66	銅製
219	SK14	埋土下位	古銭	寛永通宝	2.4	3.25	銅製、文字
220	SK14	埋土下位	古銭	寛永通宝	2.3	2.46	銅製、古寛永
221	SK14	埋土下位	古銭	寛永通宝	2.2～2.4	8.85	銅製、文字、3枚重ね
222	BⅠ区	Ⅰ層	古銭	寛永通宝	2.1	2.32	銅製
223	CⅠ区	Ⅰ層	古銭	寛永通宝	2.2×(1.9)	2.95	鉄製

第29図　遺物図版15

Ⅴ まとめ

調査区全体が耕作によって攪乱を受けており、遺構の遺存状態は悪い。また、前記したように古代以前の地形は調査区中央付近から南西端に向かって勾配が急になっており、生活空間には適していない。そのことが遺構数が少ない要因と考える。しかし、出土した土器は前期末葉の円筒系から弥生中期と思われるものまで該期があり、石器も石鏃や磨製石斧、異形石器あるいは半円状の石器等が出土している。遺構数に比べて出土遺物の種類は豊富である。

1．遺構について

検出した竪穴住居１棟（ＳＩ01）は平面が楕円形で、炉はほぼ中央にある。炉には石や土器の付設跡はみられないが、灰を掻き出す際にできたと思われる窪みがある。遺物は埋土や床面から円筒系と大木系の土器が伴出しており、縄文時代中期中頃に二つの文化圏（円筒系文化圏と大木系文化圏）が交流したとされる区域の一般的な竪穴住居と考える。

竪穴状遺構（ＳＫＩ01）は埋土の状態から竪穴住居と同時期と推察しているが、土器は出土しておらず断定は出来ない。石材の剥片が数点出土しており、作業場として使われていたのかもしれない。

土坑は調査区北東側のＡ３区から１基、中央付近のＡ２区から９基、また南西側のＢ３区から２基検出している。Ａ２区の２基（ＳＫ01・02）は底部に炭化物を含んでおり炭窯跡だった可能性があるが、耕作によって形状が歪み原形をとどめていない。竪穴住居と重複している３基は、出土遺物から推察すると１基（ＳＫ13）が縄文時代中期、２基（ＳＫ05・12）が縄文時代晩期の遺構と思われる。その他Ａ２区の１基（ＳＫ14）は底部に薄く焼け跡がみられ、寛永通宝が6枚まとまって出土している。近世の墓坑だった可能性も考えられる。

調査区の南西端で検出した溝状陥し穴（ＳＫＴ01）は底面に逆茂木痕とみられる小孔が２箇所あるが、幅が広めで陥し穴としての機能にやや疑問が残る。埋土の中位層には十和田ａ降下火山灰がブロック状に含まれていて、その状態から推察すると縄文晩期より新しい可能性もある。

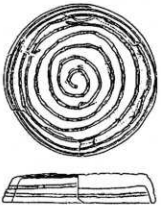
焼土遺構をＡ２区から１基（ＳＮ01）検出している。十和田ａ降下火山灰層の下で確認しており古代以前の遺構と推察できる。焼土の厚さからみて比較的長期間使用していたと思われるが、周辺の土質に踏固められたような締まりはなく、住居に伴っていた可能性は低いと思われる。

2．遺物について

出土土器の中心は縄文時代中期中葉の円筒系と大木系の土器で、円筒系の中では施文のない粘土を貼付けた胸骨文やヘラ状工具による刺突列の入る円筒上層ｄ式に比類するものの割合が高く、大木系の土器では有棘の渦巻文や隆線に調整の痕がある大木８ｂ式に比類するものが多くみられる。ＳＩ01竪穴住居からもこの二つに類する土器が伴って出土しており、円筒上層ｄ式と大木８ａ式が伴出する盛岡市付近や馬淵川水系よりやや遅れて大木式の文化圏が広まった結果ではと推察している。晩期の土器は中期のもの に次いで多く出土している。そのうち6割近くが平行沈線文、工字状文、菱形工字文の土器で大洞C_2以降に比類するものが大半と思われる。後期と弥生土器は数点だけであるが、前記したように後期の土器では岩手県内ではあまり出土例のない口縁が内反するものが出土している。大曲Ⅰ号遺跡の編年で見ると後期初頭から中葉あたりの土器に比類する。また弥生土器のうち２点（67・149）は原体の方向は異なるが、口縁から頸部にかけて

の形状が、考雑五十六巻二号「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」で分類する甕形土器のａ類に類似し、岩手県立博物館研究報告５「岩手の弥生式土器編年試論」でみるとⅡ期（67）及びⅢ期（149）に含まれると考えられる。なお、前期末葉の円筒系土器は破片１点だけの出土で、他から紛れ込んだ可能性は否定できない。

特徴的な土器としては小型の壺（68）や蓋（119）と思われるもの、および変わった沈線文様の鉢（29）が挙げられる。68は内面全体が朱色で、顔料の入れ物として使われていたと考える。119は直径が１/３程度しかないが、文様が青森県砂沢遺跡出土の蓋に類似している。29の沈線文様は東北北部における弥生土器のメルクマールの一つである鋸歯状文にも似ているが、横に３条あるのはあまり類例がない。



青森県砂沢遺跡出土

中佐井Ⅷ出土（119）

0　10㎝

出土した石器も種類としては豊富で、その中で特徴的なものとしては異形石器（183）と半円状の石器（207）が挙げられる。異形石器は、いわゆる三脚（三叉状）石器に形状が似ている。石鏃等の道具とするには材質が薄く華奢な作りであることから、祭祀的なものか装飾用として作られた石偶の可能性が考えられる。また、半円状の石器は、円筒系土器に伴う半円形扁平打製石器に類似している。

今回の調査は、中佐井Ⅷ遺跡の北西側に当たる部分を行っている。異なる時期の土器が共伴したり、ほとんどが破片で接合できた土器があまりないのは、耕作による攪乱の影響と大半が旧地形（古代以前の地形）に沿って流れ込んできたためと考える。本遺跡の中心となるのは調査区の南東側に広がる丘陵地付近で、盛衰はあるものの縄文時代の前期末葉もしくは中期から弥生時代まで長期に渡って生活が営まれていたと推察する。

（参考・引用文献）

永井久美男（1998）　近世の出土銭Ⅱ　－分類図版篇－　兵庫県埋蔵銭調査会

須藤　隆（1970）　「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」考古学雑誌第五十六巻第二号

小出野哲憲（1987）　「岩手の弥生式土器編年試論」　岩手県立博物館研究報告第５号

岩木山刊行会（1968）　「岩木山」　岩木山豊古代遺跡発掘調査報告書

一戸町教育委員会（1983）　一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅲ　一戸町文化財調査報告書第４集

弘前市教育委員会（1988）　砂沢遺跡発掘調査報告書－図版編－

青森県教育委員会（1997）　巣柳遺跡・五輪野遺跡　青森県埋蔵文化財調査報告書第219集

岩手県安代町教育委員会（2001）　安代町埋蔵文化財調査報告書Ⅴ『安代町遺跡地図』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1983）　上里遺跡調査報告書　文振報第55集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）　目名市Ⅱ遺跡発掘調査報告書　文振報第261集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1998）　横間Ⅱ谷地田Ⅰ有矢野有矢野館遺跡調査報告書 文振報第303集

Ⅵ　自然科学分析（火山灰）

中佐井Ⅷ遺跡における火山灰の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県岩手郡安代町に所在する中佐井Ⅷ遺跡は、安比川右岸に形成された河岸段丘上に位置している。発掘調査では、縄文時代中期中頃と考えられる竪穴住居跡や時期不明の焼土遺構、陥し穴などの遺構が検出され、縄文時代中期中頃の土器とされる大木式を主体とし、縄文時代晩期頃の土器などの遺物が確認されている。

本報告では、発掘調査区西側で確認された谷地形の谷斜面を埋める土層中に認められた火山灰（テフラ）と考えられる堆積物について、その性状を明らかにし、テフラである場合には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行う。また、その対比により、遺跡の立地する地形の変遷に関わる年代資料を作成する。

1．試料

試料は、発掘調査区西側で確認された谷斜面堆積土層中に認められた褐色砂層より採取された堆積物１点である。発掘調査時の所見によれば、当層は谷斜面と同方向に傾斜していることが確認されており、当層堆積時には斜面地形が残っていたと想定されている。また、当層より下位の土層から縄文時代中期中頃から晩期に相当する土器の出土が確認されている。

2．分析方法

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3．結果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスと多量の軽石から構成される。火山ガラスのほとんどは無色透明の塊状の軽石型であり、少量の繊維束状のものも混在する。また、微量の無色透明のバブル型も認められる。軽石は、最大径約６mmで粒径の淘汰はやや良好で、白色またはやや風化して淡灰褐色を呈し、発泡は良好である。火山ガラスと軽石の他には、微量の斜長石や斜方輝石、単斜輝石などの遊離結晶や安山岩と思われる岩石片などが認められる。火山ガラスの屈折率測定結果を図1に示す。n1.503～1.508のレンジに入り、n1.505～1.506にモードがある。

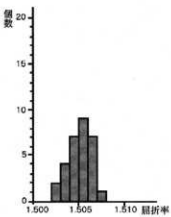


図１　火山ガラスの屈折率

4．考察

試料は、細粒の軽石および火山ガラスを主体とするテフラである。上述した砕屑物の特徴や中佐井遺跡の地理的位置、さらに既存の東北地方におけるテフラの産状の研究成果(町田ほか(1981；1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、試料は、十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物に由来すると判断される。

To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか、1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)によれば、西暦915年とされている。なお、町田・新井(2003)に記載されたTo-aの火山ガラスの屈折率は、n1.496～1.508の広いレンジを示す。ただし、n1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとされている(町田ほか,1981)。このことから、今回検出されたテフラは低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aに相当するものと考えられる。

また、東北地方北部における縄文時代晩期以降のテフラとして、To-aと同じ十和田カルデラを給源とする十和田bテフラ(To-b)がある。その噴出年代は約2000年前とされており（松山・大池,1986）、発掘調査時の所見による遺物出土層位を考慮すると、今回のテフラ層に対比される可能性も予想された。ただし、町田・新井(2003)に記載されたTo-bの火山ガラスの屈折率はn1.498～1.501であり、本試料から得られた屈折率と比較すると、本試料はTo-aに対比されると考えられる。

なお、上述の早川・小山(1998)によれば、東北地方ではTo-aとほぼ同時期、To-a噴出から約30年後の西暦947年に中国と北朝鮮の国境にある白頭山から噴出した白頭山苫小牧テフラ(B-Tm)の堆積も広域に認められている。このテフラは細粒のバブル型の多い火山ガラスを主体とし、その屈折率が高い(n1.511～1.522)ことから、To-aとは明瞭に区別される。今回の試料中に含まれる火山ガラスには、これらの特徴を持つ火山ガラスは検出されなかったことから、B-Tmに由来する火山ガラスはほとんど含まれていないと考えられる。

引用文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaterna ry marker-tephras in Japan II －Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－.Geographica l reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.

早川由紀夫・小山真人,1998,日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－.火山,43,403-407.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.336p.,東京大学出版会.

町田　洋・新井房夫・森脇　広,1981,日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－.古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.865-928,渡辺直経編,同朋舎.

松山　力・大池昭二,1986,十和田火山噴出物と火山活動.十和田科学博物館,No.4,1-64,十和田開発株式会社.

写真図版

調査区遠景（北西から）

調査区近景（東から）

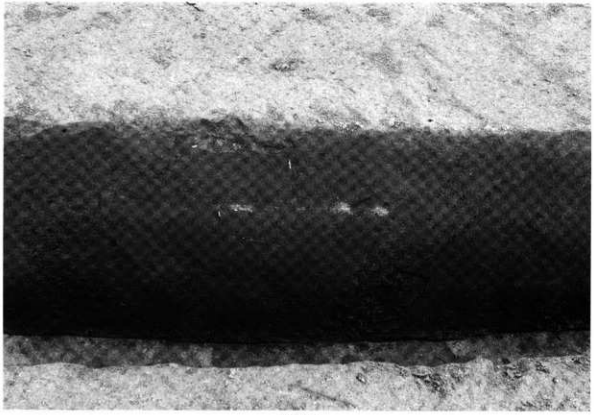
写真図版１　調査区遠・近景

調査前風景（北東側）

調査前風景（南西側）

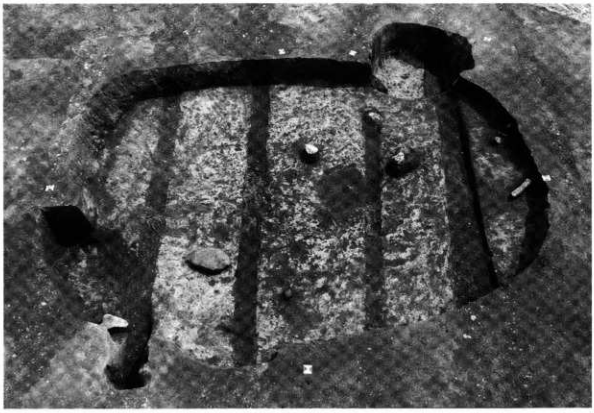
調査前風景（中央付近）

調査前風景（北東斜面）

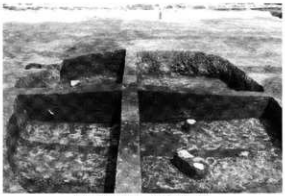


基本土層

写真図版２　調査前風景・基本土層

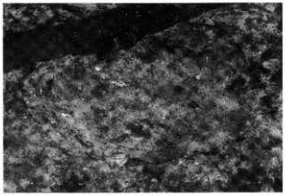


SI01 竪穴住居　平面

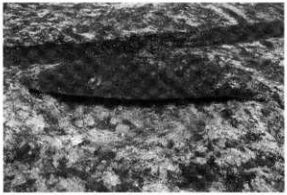


SI01 竪穴住居　断面（A—B）

SI01 竪穴住居　断面（C—D）

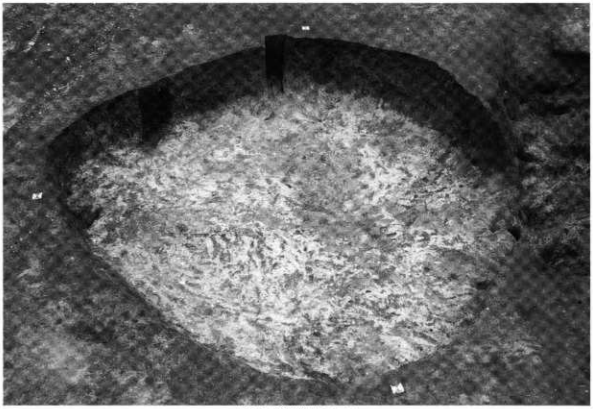


SI01 竪穴住居炉　平面



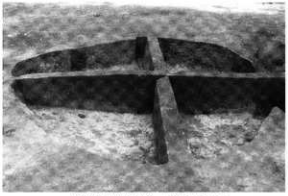
SI01 竪穴住居炉　断面

写真図版３　SI01竪穴住居

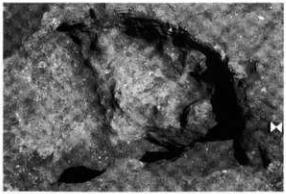


SKI 01 竪穴状遺構　平面

SKI 01 竪穴状遺構　断面（A－B）



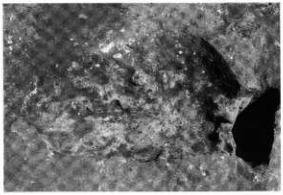
SKI 01 竪穴状遺構　断面（C－D）



SK 01 土坑　平面

SK 01 土坑　断面

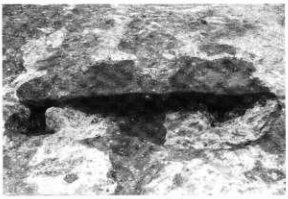
写真図版4　SKI01竪穴状遺構、SK01土坑



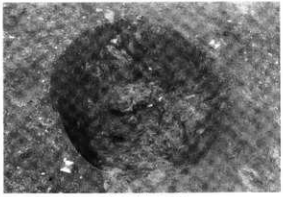
SK 02 土坑　平面

SK 02 土坑　断面

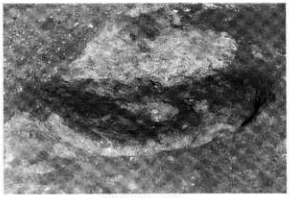
SK 03 土坑　平面



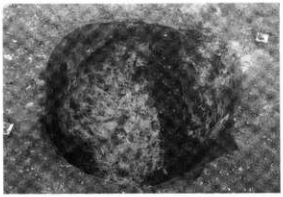
SK 03 土坑　断面



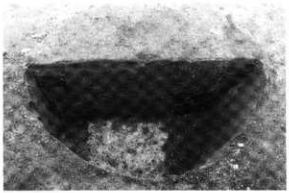
SK 04 土坑　平面



SK 04 土坑　断面

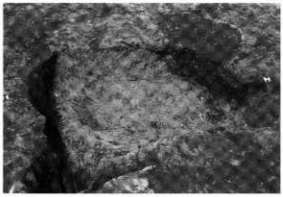


SK 05 土坑　平面



SK 05 土坑　断面

写真図版5　SK02～05土坑

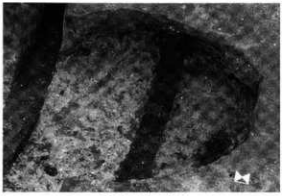


SK 09 土坑　平面

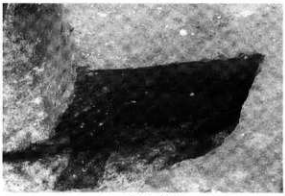
SK 09 土坑　断面

SK 11 土坑　平面

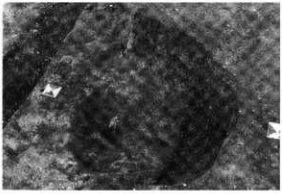
SK 11 土坑　断面



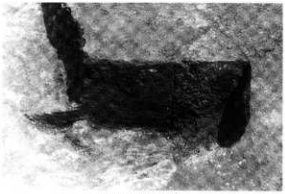
SK 12 土坑　平面



SK 12 土坑　断面

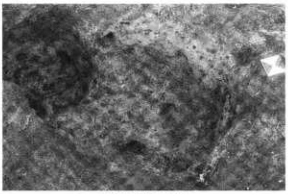


SK 13 土坑　平面



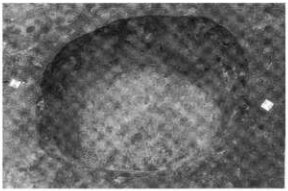
SK 13 土坑　断面

写真図版6　SK09・11・12・13土坑

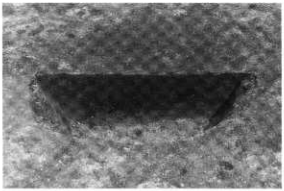


SK 14 土坑　平面

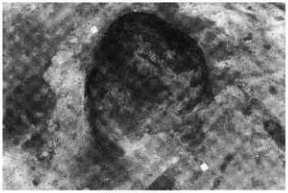
SK 14 土坑　断面



SK 15 土坑　平面



SK 15 土坑　断面



SK 16 土坑　平面

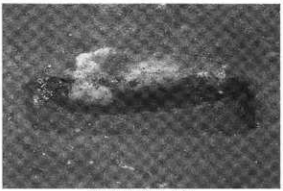
SK 16 土坑　断面

SKT 01 陥し穴　平面

SKT 01 陥し穴　断面

写真図版7　SK14～16土坑、SKT01陥し穴

SN 01焼土遺構　平面

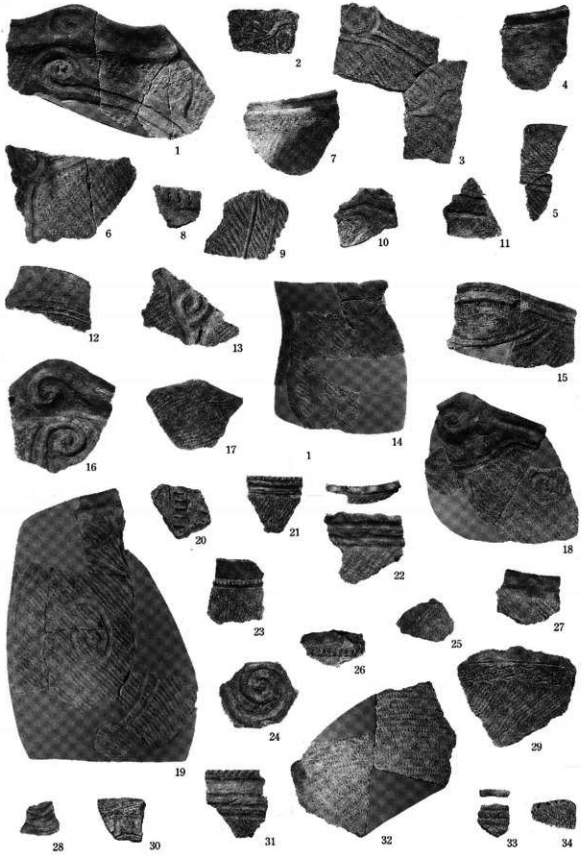


SN 01焼土遺構　断面

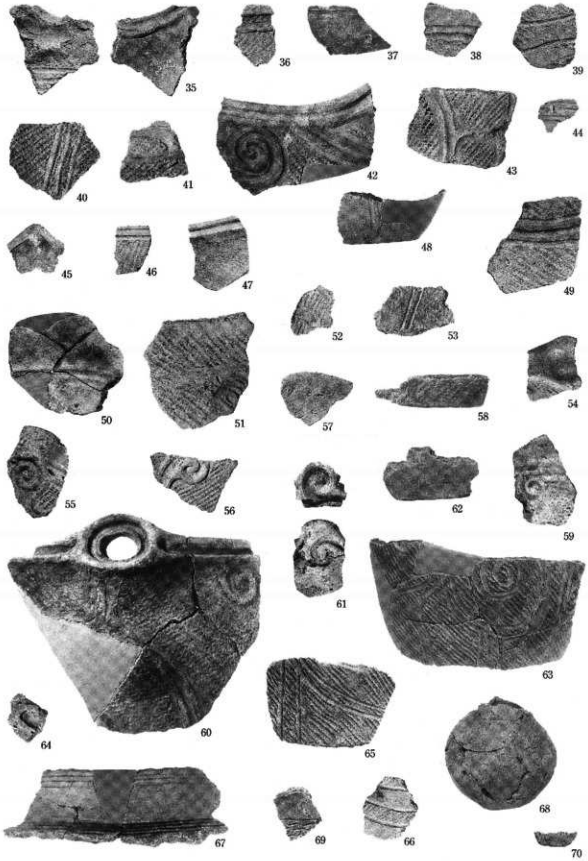
調査終了時（北東から）

調査終了時全景（真上）

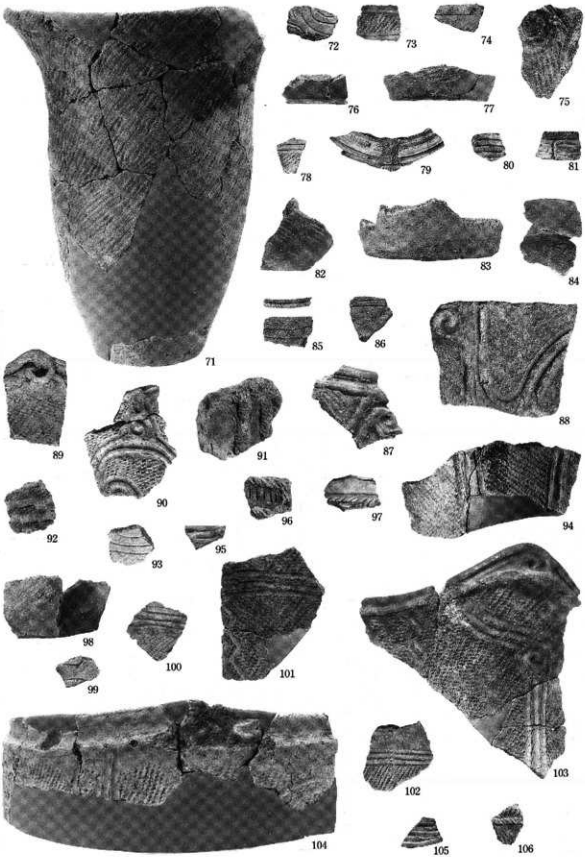
写真図版８　SN01焼土遺構、調査終了時全景


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

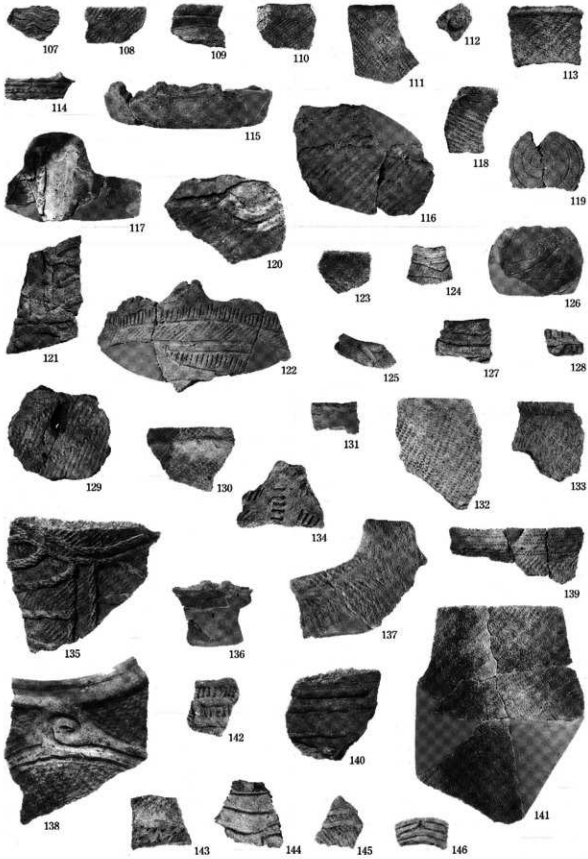
写真図版9　遺物写真1



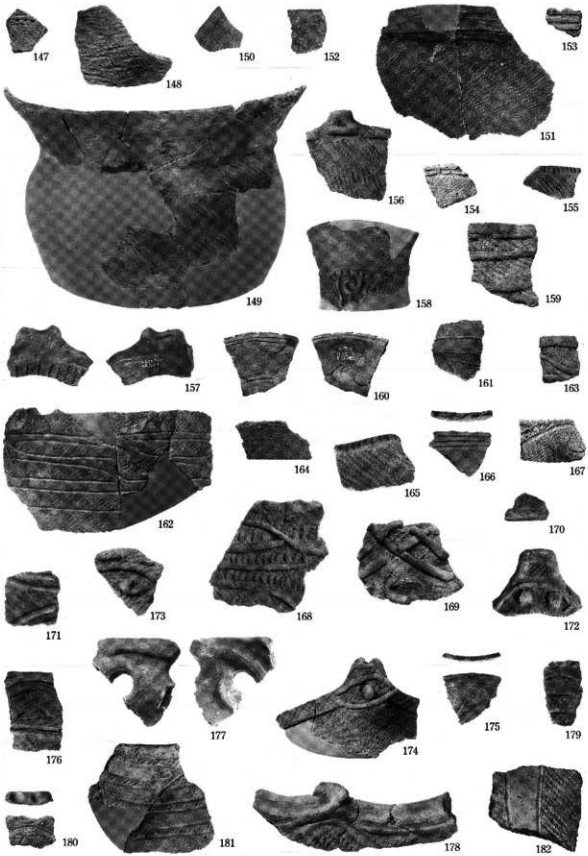
写真図版10　遺物写真2



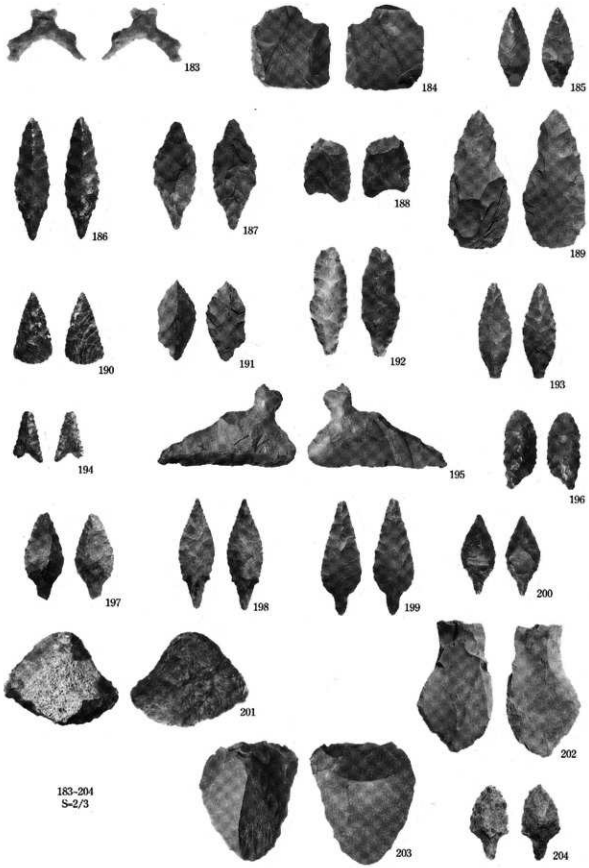
写真図版11　遺物写真３



写真図版12　遺物写真4



写真図版13　遺物写真5

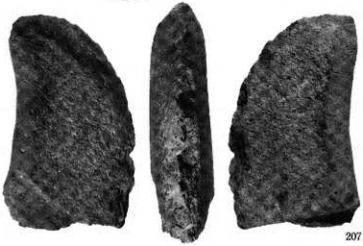


写真図版14　遺物写真6

205

205
S=1/4

206



207

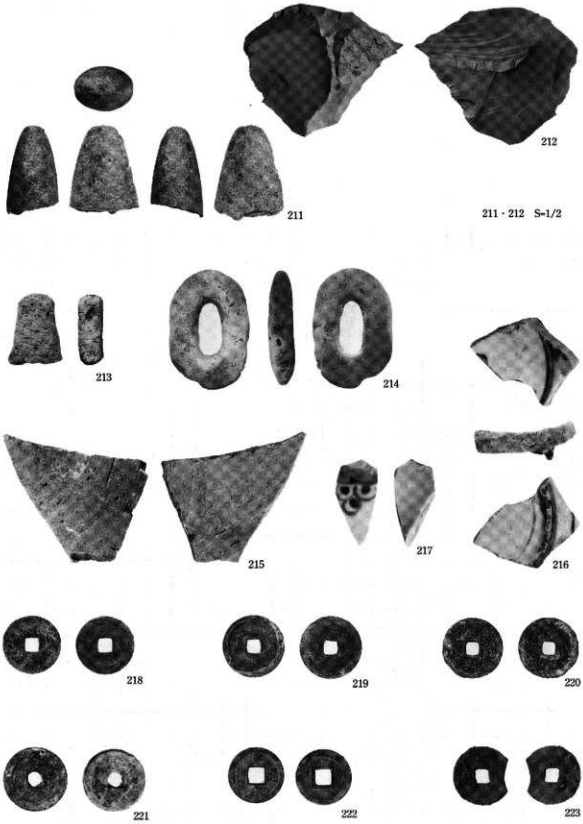
208

210

209

206-210
S=1/2

写真図版15　遺物写真7



写真図版16　遺物写真8

報告書抄録

ふりがな	なかさいはちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	中佐井Ⅷ遺跡発掘調査報告書
副書名	中山間地域総合整備事業浅沢地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第462集
編著者名	亀 大二郎
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11－185 TEL 019－638－9001
発行年月日	西暦2004年11月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
中佐井(なかさい)Ⅷ遺跡	岩手県岩手郡 安代町(やすしろまち)中佐井(なかさい) 42ほか	03523	JE55-1224	40度 07分 30秒	141度 05分 40秒	2003.04.08 ～ 2003.06.03	1,550m²	中山間地域総合整備事業浅沢地区に伴う緊急発掘調査
				世界測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中佐井Ⅷ遺跡	集落跡	縄文時代中期	竪穴住居 1棟 竪穴状遺構 1棟 土坑 1基	縄文土器 石器 土製品	
		縄文時代晩期	土坑 2基		
		縄文時代	溝状陥し穴 1基		
		近世	土坑 1基	磁器 古銭	
		時期不明	土坑 9基 焼土遺構 1基		

平成16年度 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所　長　相原康二

副所長　平野充荊

[管理課]

管理課長　亜澤正吾
管理課長補佐　小山島宏道
主任主査　中嶋賢一
主　事　狼機幸子

[調査第一課]

調査第一課長　三浦謙一
調査第一課長補佐　高橋義介
文化財専門員　金子昭彦
文化財調査員　水上朋博
〃　岡部勝則
〃　杉沢昭太郎
(柳之御所支援派遣)
〃　澁谷浩二郎
〃　村上拓
〃　戸根貴之
〃　八木勝枝
〃　丸山浩治
〃　米山寛
〃　北田熊
〃　島原弘征
〃　村田淳
期限付調査員　石崎高臣
〃　立花裕
〃　菅野情
〃　新井山えり子

嘱託　高橋清助
〃　常泉治美
〃　伊藤滋子

[調査第二課]

調査第二課長　佐々木清文
主幹兼課長補佐　中川重紀
文化財専門員　小山内透
(県教委研修派遣)
〃　金子佐知子
〃　濱田宏
〃　羽柴直人
文化財調査員　吉田充
〃　岡部徳幸
〃　早坂淳
〃　小松剛也
〃　窓岩伸吾
〃　亀澤盛行
〃　鈴木裕明
〃　新妻伸也
〃　林徹
〃　星雅之
〃　西澤正隆
〃　丸山直美
〃　村木敬
〃　福島正和
〃　北村忠昭
〃　須原拓
〃　川又齊
〃　中村絵美
期限付調査員　小針大志
(6月退職)

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第462集

中佐井Ⅷ遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業浅沢地区関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年11月10日
発行　平成16年11月15日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11地割185番地
TEL(019)638－9001
FAX(019)638－8563

印刷　有限会社光文社印刷
〒020-0106　盛岡市東松園3丁目12-1
TEL(019)661－3441